

小笠原諸島の多言語状況に関する実態調査報告

ダニエル・ロング編

目次と執筆者

- 第1節 小笠原の「多言語対応」に関する実態調査 (ダニエル・ロング)
- 第2節 小笠原の学校教育の方針と現状 (南谷 奉良)
- 第3節 小学校の英語教育の現状：報告と分析 (南谷 奉良)
- 第4節 中学・高校の英語教育・国語教育の現状：報告と分析 (張 衛良)
- 第5節 小笠原の情報化 (下川 明日美)
- 第6節 小笠原の多言語情報提供 (堀内 みき)
- 第7節 小笠原の多言語対応の試み：ビジターセンター案内の中国語版作成の問題点と課題 (ゼイ・エン)
- 第8節 「小笠原ことば」に関する展示の報告 (橋本 卓帆)
- 第9節 観光資源としての「小笠原ことば」 (新井 正人)
- 第10節 小笠原の「多言語対応」の実態、問題点、提案 (ダニエル・ロング)

1. 小笠原の「多言語対応」に関する実態調査 (ダニエル・ロング)

1.1. 調査について

この調査は、首都大学東京の平成18年度傾斜配分研究である「小笠原における人と自然の共生をめざした学際的総合研究」(代表者：都市教養学部・理工学系の可知直毅教授)の一環として行われたものである。2006年8月28日から9月6日にかけて、日本語教育学ゼミの受講生と共に私(ロング)は小笠原で現地調査を行った。本稿はその研究成果報告書である。

今、言語と関係する小笠原の課題で、研究が必要とされているテーマは複数ある。本報告書でその中からいくつかの物を取り上げて追究している。それはすなわち次の通りである。本節では、私(ダニエル・ロング)が今回の『小笠原の「多言語対応」に関する実態調査』の概説を行う。第2節では、村の教育長や諸学校の校長や教員を対象にした面接調査のデータから、南谷奉良が小笠原の学校教育の方針と現状を探る。第3節では南谷が、小学校の英語教育に注目して、実態調査や授業参加などから得られたデータを分析し、その現状を明らかにする。第4節では、張衛良が小笠原の中学と高等学校の英語および国語教育の現状を分析する。第5節で、下川明日美が孤島と呼ばれてきた小笠原諸島における情報化の進行具合を実態調査に基づいて検証する。第6節では堀内みきが、小笠原の様々な公的機関の提供している多言語情報の実態を分析する。なお、今回の「小笠原多言語対応」の研究プロジェクトは実態を調査するものだけではなく、本プロジェクトのメンバーがそ

それぞれの専門分野からの（小規模ながらの）貢献を試みた。第7節では、ゼイ・エンが張衛良と協力して作成した小笠原ビジターセンターの中国語版案内を紹介し、その作成に至るまでの課題と問題点を分析する。第8節で橋本早帆が自ら企画した「小笠原ことば」に関するビジターセンターの特別展示を概説する。第9節で新井正人が、小笠原ことばを観光資源として捉え、「目につく小笠原ことば」の写真データを分析する。第10節で、私（ロング）が今回の調査結果をまとめながら、その位置づけ、意義、そして残された課題を検証する。

1.2. 世界自然遺産登録

自然遺産とのことばとの関係についてはのちほど考えることにして、ここで、小笠原諸島の世界自然遺産登録の進行状況を見よう。2007年1月末の農林水産省林野庁と外務省の2つの発表を見れば、登録は着々と進んでいることがわかる（林野庁2007）。

『小笠原諸島』の世界遺産暫定一覧表への記載について

我が国政府は、1月29日（月）、「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」（通称世界遺産条約）に基づく我が国の「暫定一覧表」に、自然遺産として「小笠原諸島」を記載することを決定しました。

1. 環境省と林野庁では、平成15年に学識経験者からなる検討会を設置し、世界自然遺産の候補地として、平成17年7月に登録された「知床」のほか、「小笠原諸島」と「琉球諸島」の3地域を選定しました。
2. 残る2地域のうち、「小笠原諸島」について、学識経験者による科学委員会の助言を受けて小笠原諸島の世界自然遺産としての価値を整理するとともに、地域連絡会議において地元の合意が得られたことから、本日開催された世界遺産条約関係省庁連絡会議において、自然遺産として「小笠原諸島」を世界遺産暫定一覧表に記載することを決定しました。
3. 今後は、外来種対策などについて、地域連絡会議及び科学委員会における議論を踏まえ、推薦に向けて概ね3年程度かけて取組を一層推進し、推薦の際には将来的にも世界遺産としての価値を維持できる見通しをつけることにより、世界自然遺産の登録が実現できるよう関係機関と一体となって努力していくこととします。
4. （省略）

同じ時に出された外務省(2007)の発表は以下の通りである。

「我が国の世界遺産暫定一覧表への追加記載物件の決定について」

1. 我が国政府は、1月29日（月曜日）、「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」（通称 世界遺産条約）に基づく我が国の「暫定一覧表」に、文化遺産として4件、自

然遺産として1件、計5件の物件を追加記載することを決定し、追加記載物件の関係資料を、世界遺産条約の事務局であるユネスコ世界遺産センターへ提出することとした。

追加記載物件：

文化遺産（4件）

- * 「富岡製糸場と絹産業遺産群」
- * 「富士山」
- * 「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群」
- * 「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」

自然遺産（1件）

- * 「小笠原諸島」

2. 「暫定一覧表」とは、条約の各締約国が、将来「世界遺産一覧表」に記載することが適当であるものの目録として、世界遺産条約の事務局であるユネスコ世界遺産センターへ提出するもの。各国はそこから1年2件まで「世界遺産一覧表」への記載を推薦できる（但し、2件の場合は、そのうち1件は自然遺産とする）。

その後、諮問機関による検討を経て、世界遺産委員会の審議により記載の可否が決定される。これまでにユネスコ世界遺産センターへ提出している我が国の「暫定一覧表」には、文化遺産4件が記載されており、そのうちの2件は、既に記載推薦書を同センターへ提出している。

北海道の知床地域の世界遺産登録が行われたのは2005年7月である。その直後の第3四半期（7月～9月）に観光客が13%増加する時期があった。登録前の2004年の155万人が、2005年に173万人に増えた。この劇的増加は登録直後の一時的な現象といえ、2006年にも165万人が訪れたので、観光客が増えているのも事実である（斜里町2005）。小笠原の年間の観光客数は現在約15,000人だが、世界遺産登録が済めばマスコミの脚光を浴び、観光客が増えると見込まれている（Johansen 2006）。

多言語対応面では、知床が外国人観光客向けにパンフレットを作成している。それは韓国語、英語、中国語（本土、台湾の二種類）の4種類である（斜里町2005）。小笠原も世界遺産登録によって、国内のみならず、国外から訪れる観光客も増えると見られているので、彼らの言語対応も考えなければならない。

1.3. 小笠原の独特な言語環境の歴史と現在

小笠原諸島は元々無人島であり、英語名である Bonin Islands は「無人島」（ぶにんじま）の転訛であると見られている。諸島に日本語がやってきたのは、日本領土となった1870年代であったが、その前半世紀近くにわたり、複数の言語を使う人々が住み着いていた。

1830年より、米国やヨーロッパ、太平洋諸島からやってきた人が入植していたが、島はどここの国家にも所属しなかった。そのため、学校教育のような社会制度が発達せず、ほと

多くの島民は読み書きができなかった。島民が母語としていた言語は多数で多彩であった。インドヨーロッパ語族から英語、ポルトガル語、ブルトン語、ドイツ語、イタリア語、デンマーク語、スペイン語が入った。西オーストロネシア語族からは、チャモロ語、マラガシー語、ブカ（ハリア）語、そしてフィリピンの言語（詳細不明）が入ってきた。東オーストロネシア語族からは、ハワイ語、タヒチ語、北マルケザス語、キリバス語、ポナペ語、カロライン語が入った。そして、方言などの詳細は不詳だが、中国の言語を話す人もいた（ロング編 2002a）。現在の小笠原ことばに見られる、英語とも日本語とも異なる単語（植物のタマナなど）はほとんどこの時代に使われているものである。

1870年代に日本の領土となり、在来島民が日本国へと帰化した。「帰化人」の年少者は学校へ通い、徐々に日本語が使えるようになったが、19世紀末まで、彼らが最初に習得する「第1言語」、そして親や兄弟と話す「家庭内言語」は英語だった。初期の日本人開拓者の多くは八丈島出身で、島の日本語は八丈語を初めとする多数の方言が交じり合う「コイネ」（複数の方言からなる混成型の新生方言）であった。

20世紀に入ると帰化人のバイリンガル生活が続くが、大正・昭和初期から（英語よりも）日本語のほうを得意とする帰化人も増えてきた。一方、日本語と英語の両方の文法構造を同一文内で混ぜる帰化人も増加した。これは戦後に花開く「小笠原混合言語」の萌芽であった。戦争で諸島のほぼ全島民が内地へと強制疎開させられ、戦後一時期再び無人島へと戻った。

1946年秋に、欧米系の島民のみの帰島が米軍に許可された。後に米海軍が作った学校で島の子供たちが英語による教育を受けた。戦後に育った欧米系島民が最初に習得した第1言語も兄弟や同年代と話すときに使う家庭内言語は小笠原混合言語であった。つまり、戦前に複雑なコード切り替えに始まったこの話し方が戦後に子供たちの母語そのものとなった。標準的な英語も標準的な日本語も、むしろある程度成長してから、第2の言語、第3の言語として習得したのであった。

以上の歴史概略から分かるように、小笠原で170年あまりに渡り英語が使用されたのである。Navy（米海軍）世代と呼ばれる現在の中高年の欧米系島民はこんにちでも英語を使いこなしている。しかし、残念なことに、彼らは自分がバイリンガルに育った経験はプラスに思わず、むしろ苦勞してきた原因だと意識している。この理由で自分たちの子供をバイリンガルに育つことを嫌う。せつかくこうした多言語社会的な歴史を持つ小笠原でも、現在の若い人のほとんどは日本語しか話せない。将来、増加する外国人観光客へと対応を担うのは島民自身であれば、島の独特な歴史を活かした言語政策、言語教育が必要と思われる。

2. 小笠原の学校教育の方針と現状 (南谷 奉良)

本節では、小笠原の戦後言語教育史からはじめて、現在の小笠原の言語教育政策について東京都小笠原村教育委員会隅田房蔵教育長および小笠原村立小笠原小学校の金子和明校長、小笠原村立小笠原中学校の前田校長への面接調査の結果を紹介し、小笠原の言語教育に関する展望を検討する。またインタビューで示された小笠原の将来像から期待すべき「多言語の共存指針」を提示する。

2.1. 小笠原の戦後言語教育史素描

戦後、小笠原諸島はアメリカ合衆国の施政下に置かれる。この米軍統治時代に、住宅として支給したカマボコ型小舎 (quonset house) が教会としても使用され、その教会の牧師であるフランク・ゴンザレスを代表として、1953年3月からプライベート・スクールが運営されていた。「カマボコ小舎」では英語による授業が行われ、帰化した欧米系島民は英語と3R (Reading・wRiting・aRithmetic) を学んでいた。

カマボコ小舎に代わり、公的な教育機関として設立されたのが1956年の7年制ラドフォード提督初等学校 (以下「ラドフォード」と略する) であり、小笠原小 (中) 学校のいわば「前身」教育機関となる。現在ではラドフォード学校の記念碑が跡地であるお祭り広場に残されており、その盾形の校章は小笠原小中学校の校章でも継承されている (図 2-1、図 2-2)。1968年の小笠原諸島返還後も校章の形を変更しないことは、政治的な配慮を別として、小笠原の歴史遺産として貴重であると言える。



図 2-1 ラドフォード提督初等学校記念碑：お祭り広場、父島

ラドフォードの設立に伴い、カマボコ小舎は診療所となり教育の役割を終えた。ラドフ

オードは7年制とはいえどクラスは3つに分類されただけであり、本来的には異なる年級に属する生徒たちが同じ教室で、同じ授業を受けていた。また生徒の多くは帰化した「日本人」島民の子どもではあったが、アメリカ海軍に属する両親をもつものもいた。授業料は米軍の子どもには請求されなかったが、「日本人」島民は月2ドルを支払っていた。

ラドフォードの教員はアメリカ海軍からの通達を受けて任命された。¹ 教員を務めたのはフランク・ゴンザレスに加え、ラドフォード提督の教師、Robert Hashimoto と George Yokota であったが、実質的に教鞭をとっていたのは后者の2人であった。Hashimoto の退任後は、アメリカ人である Jack Stettenbenz が代わりを務めた。授業は基本教科に体育実技を加えたものであり、授業はすべて英語で行われた。² それはアメリカ政府の教育プログラムにおいて明示されており、「校用語」が英語であったことは、後述するように、現在の小笠原小中学校における英語クラスの導入を鑑みて重要であると考えられる。³ また学校だけでなく、当時の周辺環境が英語によって記述されていたとすれば、わずか50年後に英語による言語景観が衰退していることは、現在の小笠原を考える上でも注目に値する。



図 2-2 小笠原小中学校記念碑：小笠原小中学校校門前、父島

1968 年小笠原諸島は返還され、教育機関も応じて日本行政化に置かれ、返還日同日には美濃部亮吉知事の時代に小笠原小中学校と小笠原高等学校が設立された。返還からしばらくの間、校用語は英語と日本語併用であった。どの時点から日本語が優勢となったかは明

¹ 教員の採用等についてはワシントン海軍公文書館に保存されている 1955 年付けの文書に記載されている。(ロング 2005:94)

² それは現在の教育科目と比較しても見劣りしないが、History の学科では、第二次世界大戦の項目において日本に関する言及は複雑な政治的背景を理由に避けられたとされている。

³ 「カマボコ小舎」及びラドフォード提督初等学校に関する記述は主に、Imai 2003 を参照した。そこにアメリカ政府による教育プログラムの資料も引用されている。

確ではないが、現在の小笠原小学校では新「科目」として英語を導入するほどにまで、英語は校用語の地位から脱落している。

2.1.1. 鷗田教育長面接調査（調査者：新井・南谷）

以下は 2006 年 8 月 28 日に小笠原村役場にて行った鷗田房蔵教育長への面接調査をメモの体裁で記録した概要である（図 2-3）。この調査では小中学校への英語教育の導入について、また鷗田教育長のもつ言語プランと「島用語」の将来についての質問を行った。なお教育長の所属と仕事、管轄は小笠原村の行政（学校教育・社会教育・文化財関係）、学校教育では小中学校を担当している。高等学校は都の教育委員会によって運営されている。



図 2-3 教育長室で鷗田房蔵の話聞くロングゼミ

2.1.2. 今後の英語教育の理念・目標について

鷗田教育長によれば、占領経験の少ない日本は多言語の支配をそれほど強く受けておらず英語に対しては依然として耐性があるが、グローバル社会での国際共通語としての英語は今後通訳を介しての言語ではなくなるはずであり、小笠原においてはほとんど第二公用語として定着させたい、とのことである。占領後 23 年間、欧米系の人々が少なくなる中、かつてのような英語・日本語が併存するような小笠原が望まれる（これは必ずしも「混合言語」を意味せず、どちらの言語も使用できる状態を指す）。また英語教育の理念は、「教科ではなく、課外活動として学ばせること」、「ことばは学力ではない」であり、「教科の犠

性者つくらない」ことである。例えば数学や歴史と同様に教えることは成績を求めさせる一つの学課になってしまい、コミュニケーションの喜びを失ってしまう可能性がある。テストではなく、目標を立てて通常のコミュニケーションを学ばせることが肝要である。ただし、英語を学んだという功労に対しては評価ではなく認定を与えることを検案中。隴田教育長は実態調査として英語を教えている東京の進学校を訪れ、「教科としての英語」ではない英語教育の構想を考え、「総合学習」として課外活動の一環として英語を導入した。また教員にも管理ではなく、サポートする体制の指導を施している。常にネイティブの先生が学校にいる環境をつくり出すことで、より自然な言語環境を設けることを念頭に置いている。隴田教育長の面接調査から英語教育のテーマを分類すると以下の3つになる。

- (1) 世界に通じる言語教育
- (2) 学力ではなく、コミュニケーションツール
- (3) バイリンガル教育。

100年後の小笠原の言語状況についてその理想を尋ねたところ、100年後には英語教育が浸透し、英語と日本語が併存する状況があることを期待しているとのことだ。小学校から英語を導入することは急進的とされるが、隴田教育長は小笠原の歴史や文化、また今後の社会的発展を考慮して英語教育を導入している。直接的なきっかけはG・ブッシュが2002年に小笠原を訪問した時であった。欧米系の人々は英語で挨拶を交わしているにもかかわらず、子どもたちが無言で握手をしていたのを見て、英語教育の重要性に気づき、より広く豊かなコミュニケーションを求めて英語の促進を決意した。コミュニケーションとしての英語実践を行うため、修学旅行ではどこかの外国の市と姉妹都市の協約を結び、留学先や修学旅行先になればと検案中。現在は関西地方、京都・奈良を選び2泊3日の旅行が組まれているが、小笠原特有の地理状況により竹芝棧橋出航まで（次の便まで）は東京で企業研修や高校受験のための学校見学や観光を行う。「外国人と話してこなければならない」という修学旅行の課題があるとのこと。

2.1.3. 村営と都営。教員の採用方法について

小中の教員は飯田橋のある人材派遣会社 Interact から派遣されてきたネイティブの教員。小学校ではコミュニケーションをゲームや音楽、ダンス等を通して教えるが、中学校ではすこしレベルをあげて、文法を教科書の進度にあわせて教える。教員採用の条件は、「通常のコミュニケーションができること」「常駐教員と同じく1日8時間勤務」、「学校行事に参加すること」。授業数は Mark Stone 教員の場合、小学校が週に10時間 中学生の場合週3時間行われている。派遣会社から教員を採用するにあたって、授業の研修は会社で行われている。また村営と都営で教育状況に齟齬が生まれないように、教科部会が小中高の教員間で行われ、校長会も行われている。

2.2. 前田学校長面接調査（新井・南谷）：小笠原小学校学長室

小笠原にはやはり観光客が少なく、「内地からのお客さんと外国からのお客さん」に頼らざるを得ないので、英語教育を促進することはグローバル社会への適応だけでなく、小笠原の経済的な維持にも役立つ。またネイティブ・スピーカーに教えさせる利点は、授業で子どもたちは英語という言語そのものだけでなく、それを関係する文化を知ることでもあることである。例えば、授業で「thumb mark」などを使って Mark 先生が数を数えたりするだけで、文化への違和と興味を湧かせることができる。また教師の日本語が不十分であることによって、英語を使わざるを得ないという状況が結果的に指導と学習に反映することになる。さらに英語を使用する状況を設けることは生徒だけでなく教員にも益があることで、「give and take」の関係が職員室でも行えるようになる。実際に、日本人教員は Mark Stone に英語で話しかけ、彼は日本語で彼らに話しかけるという「mutual understanding」のスタイルが確立している。Mark 先生の給与は「lesson fee」だけとして支払われるのではなく、小笠原に滞在することをトータルに考慮したものとのことである。

2.3. 小笠原の言語教育についての展望

陽田教育長と前田学校長の面接調査から窺えるのは、かつて存在した小笠原の世界を回復することではなく、時代の趨勢を予測した上で言語教育が図られていることである。研究的な側面からみれば、小笠原ことばや混合言語は保存すべき貴重な言語資産であるが、現在の小笠原の言語教育にはそのまま反映されてはおらず、グローバル社会に適応する小笠原が求められている。また英語を導入するという教育方針は、ラドフォード時代と比べていかに小笠原の言語が変化したかを示すものである。

「学科ではなくコミュニケーションツール」としての英語は小笠原小学校において、総合学習として採用されている。それは文部科学省による平成 10 年新学習指導要領の総則第 3 第「総合的な学習の時間の取扱い」6 項 (5) にも適切に沿ったものであり、そこには「国際理解に関する学習の一環としての外国語会話等を行うときは、学校の実態等に応じ、児童が外国語に触れたり、外国の生活や文化などに慣れ親しんだりするなど小学校段階にふさわしい体験的な学習が行われるようにすること。」とある。⁴ 第 3 節で見ると、授業ではノートを必要としないコミュニケーションに重点を置いた体験的な教育が行われている。

さらに前田学校長の発言に見られるように、小笠原は日本の秘境として経済的な収入源を「内地」と「外国」に求めているため、今後グローバル社会やユビキタス社会の影響はあるにしても、それ以前に言語的な接触は求めずとも直面しなければならない事態であるかもしれない。言語を外（本土や外国）に行くために学ぶのか、内（小笠原）にやっつく

⁴小学校学習指導要領 第 1 章総則第 3 総合的な学習の時間の取扱い第 6 項 (5)

る人のために学ぶのかも、また重要な問題となる。そして上述の調査では小笠原において英語が異文化として扱われており、そのことは注目すべき事実である。19世紀から小笠原は固有の英語でもってその世界を記述されてきたが、現在小笠原の世界はほとんど日本語で表現されている。当惑しているのは名前を複数もつ人々ばかりでなく、複数の言語で呼ばれてきた小笠原の世界でもあるかもしれない。

仮に今後、小笠原において二つの言語が島用語となるとすれば、あるいはそれを目標とするとき、どのような方針・方策を講じればよいのか。以下小笠原の英語教育だけでなく、小笠原ことば教育も兼ねた小笠原の言語プランを提示し、より多声的な小笠原を想像してみる。

2.3.1. 多言語の共存指針

現在小笠原の父島において、子どもたちは小笠原ことばを知らないだけでなく、それを学ぶ機会もほとんど与えられていない。これまでおがさわら丸の週1回の発着を繰り返す定期運行が小笠原と本土を限定的に、「不便に」往復することで島の文化や自然、言語を適度に保ち、島の経済を安定的に維持していたと考えられるが、近年の本土からの観光客の言語的な影響に加え、第5節で見るようにインターネットの普及も徐々に進み、事実父島では標準語化が進んでいる。そして中止されていた小笠原空港の建設に再検討の機運も見られ、東京から地理的には1000km離れていても、今後小笠原は言語的には港区の隣にあるほど近くなることが予想される。

小笠原固有の歴史と言語を保存するのではなく発展させるという意味で、ここでは多言語（標準日本語・英語・小笠原ことば・混合言語）をいかに共存させるかのプランを考えてみたいと思う。その際には、膠着した統語に縛られる大人たちよりも、柔軟にことばをいじくって遊ぶ子どもたちの視点を採用しよう。

例えば、19世紀から発達してきた小笠原の英語（Bonin English）はヨーロッパの言語だけでなく南太平洋諸語の影響を強く受けて、およそピジンやクレオールという形式ではなくくれない言語体系を構成し、さらに日本語の影響にさらされることで（話者にそれぞれ変異はみられるものの）小笠原特有の英語体系を獲得したわけであるが、戦後小笠原混合言語（Ogasawara Mixed Language）へと発展した際にその言語生成に寄与したのは何よりも子どもたちであった（ロング 2002b:2）

2.3.2. Language Immersion 1 ことばの混合展示

小笠原ことば教育と英語教育を連結させるには学校教育だけでなく、子どもたちにことばを教える地域環境の協力も必要となる。例えば建物の看板や街路の標識などは、世界を記述するためのことばを教えてくれるものであるが、そうした言語景観から小笠原言語改革を進めるのが良いかも知れない。

言語景観から出発するとき、教育として考慮すべきは「ことばが指示するモノ」と「こ

とば」を近づけなくてはならないことである。図2-4にみるように、この標識は小笠原がどれかで孤島であるかを示すだけで、実際の対象を示すには「ことば」が遠すぎる。最近では言語教育として「レアリア」(実物教材)⁵が使われることもあるが、小笠原でもレアリア(実物)とことばを距離的に縮めて一挙に言語景観として現れるような体験的な方策が望まれることになる。学校教育の方でこれは既に実現されており、第3節で詳しくみるように、職員室やトイレには英語での表記がなされている。学校の外に出ても小笠原ことばや英語に触れられるプランではやはり島にある建物や道路、自然の近くに「ことば」を置くことが検討されるだろう。



図2-4 小笠原からの距離標識、左手からタコノキ。 湾岸道路

しかし図のような活字が町にあふれることは望まれない。小笠原の美観を損なわないように、ことばが風景に溶けこむような「Language Immersion」がふさわしいと考えられる。

⁵ 「ことばの教育の現場では、教育の補助として使われる「本当の物」(教育のためにわざわざ作られたものではないもの)を「レアリア」realia」と呼びます。この「realia」ということばは、「事物」「本当の(もの)」を指すラテン語「realis」の中性複数形です。このことばは、一般に教育の補助として使われる「本当のもの」全般を指しますが、特にその「本当の物」に含まれている情報に注目して利用するときには「生教材」と言って区別することがあります。」国際交流基金(2006:3)

さて、Language Immersion は動物園の展示形態である「Landscape Immersion」から着想を得たものである。ランドスケープ・イマージョンはニューヨークのブロンクス動物園を代表として、アメリカに普及している動物の新しい「見せ方」である。動物愛護の視点から見ればこの展示形式にはさまざまな議論があるが、ここではその展示法をことばに応用することを提言してみたい。

ランドスケープ・イマージョンは直訳すれば「風景に浸しこむ」であり、檻や柵など人工物を廃して、本物（あるいは模造）の自然を移植することで動物たちをより自然な環境に近づけ（それが本当に動物にとって自然であるかはともかく）、来園客もまたあたかも自然の中に迷いこんだように錯覚することになる。『動物園にできること 「種の箱舟」のゆくえ』から、イマージョン展示の一例を引いてみる。これはブロンクス動物園の複数種同時展示（混合展示）の例である。

霊長類のゲラタヒヒの展示は圧巻だ。おそらくぼくが今まで見たことのある動物の展示のなかでも最高のもののひとつだ。エチオピアの高地の草原に棲む彼らは、ヒヒの仲間のなかで唯一、草食の種である。展示は広々した丘陵を下から見上げる形になっていて、ハイラックスやアイベックス（ヒツジの仲間）も同じ囲みのなかにいる。いわば複数種同時展示（混合展示）だ。（川端裕人 1999:35）

Language Immersion では言語を学習的に指示するのではなく、ことばを町の風景に浸しこむように、子どもたちが遊んでいるときにふと目に入るような展示が目指されるだろう。そのため活字による表記をできるだけ避けて、その展示板を村役場や教育関係者がつくるのではなく、子どもたちにつくらせることが肝要となる。それは学習の一部とはなっても子どもたちにとっては図画工作の時間に値すると考えられる。例えば小学校の総合学習の時間において、子どもたちに島にあるモノを選んでもらい、対象を表示する板やプレートなどに絵を描いてもらい、日本語と英語、さらに小笠原ことば（動植物の島名など）があればそれらの文字を記してもらうような課題を設ける。もし子どもたちが作成した展示板があれば、小笠原支庁前の *Erythrina boninensis* という訳のわからない樹は「ビーデ・ビーデ」であり、「ムニンデイコ」であり、「coral tree」であることが子どもたちには了解されるはずだ。そのプレートがあれば奥村のヤンキータウンの屋根を貫く巨木を、*Calophyllum inophyllum* と長たらしく呼ぶ必要もなく、それが「タマナ」であり、「テリハボク」であり、「Alexandrian laurel」であることが学習されるのではないだろうか。つまり風景（レアリア）を伴ったことばの複数種同時展示（ことばの混合展示）であり、小笠原にふさわしい固有の景観づくりが実現されるはずである。

現在父島には既に植物の名前（学名・和名・島名）を表示する首飾り状の樹札（図 2-5）が見かけられるが、このような札を樹木だけでなく建物や海岸にも置いてもよいはずだ。子どもたちの絵（図 2-6）や文字ならば観光客も微笑ましく写真を撮り、彼らもまた複数の

言語を学ぶチャンスを与えられるはずである。幸い小笠原は人々が行動する範囲が狭く、食料品を集中的に買い求められる店がほぼ限定されているので、足繁く通う人々が店内で食料品の前に飾られた展示板を見れば、それもまた学習するチャンスとなるだろう。



図 2-5 モンパノキの樹札



図 2-6 小笠原保育園の壁に描かれた海洋生物

2.3.3. Language Immersion 2 街路に名前を

小笠原の歴史を反映した言語景観、複数の言語を使用するプランでは、街路に名前をつけることも考えられる。ヨーロッパの諸都市ではほとんどの街路に、それが袋小路であれ抜け道であれ、固有の名前がつけられている。どの名前も歴史的陰影を帯びて街を紹介するための道標となることもある。小笠原の歴史は他の文化圏と比べれば短く、まだ歴史や伝説、神話といった観光資源が少ないため、21世紀からは過去の歴史を継承する形で、歴史づくりにも励むことも可能である。グリーンペペの命名などはその典型だが、小笠原には歴史がやはり必要とされる。⁶

仮に小笠原の街路に複数言語による名前を設けるとすれば、小笠原の和洋混合的な文化を反映することができるだろう。現在湾岸道路など主要な通りに名前はついているものの、細かい入り組んだ道には街路名の標識は見られない。街路の名前は公募で頼るなどいくつか考えられるが、子どもたちに命名させる方がより健全な街路づくりが実現されるのではないだろうか。街路に命名することは活気と秩序をもたらすこともある。

仮に子どもたちに命名させることの許可が自治体から下りたとして、どのような学習が行われうるだろうか。総合学習の時間を使ってもよければ、地理や国語の授業の時にでも子どもたちにいくつかの名前の候補を匿名で提示してもらおう。名前の構成素は言語的に複

⁶ 1970年代に島民の宮川典継氏がつくった神話によって命名された。「グリーン、グリーン」とおまじないをしながら唾を「ぺっぺっ」と吐くと不思議な光る茸が生えてきた。(ロング&橋本 2005:75)

数であればあるほどよく、教員側からヒントを出してもらってもよいだろう。

2.4. 100年後の小笠原

日本語と英語、小笠原ことばが共存する方策として2つの言語改革プランを提示したが、それはあくまでもプランに過ぎない。現実的にこのようなプランを実行するとなれば島全体が動かなければならない事情があることは知れている。しかし、今後ますます情報化の波によって言語の防波堤が崩れ、小笠原固有の言語生態がなくなることは恐びなく、絶滅危惧種の言語を守るためにはある「大胆な方策」を誰かが講じることは必要である。

本節冒頭で確認したように小笠原のラドフォード時代は英語が優勢であったのに比べ、小笠原小学校時代からは日本語が優勢となる。いつもどちらかの言語が水面下に沈んでいたが（図2-7）、100年後の小笠原には2つどころか複数の言語が併存していればと思う。

一本岩折れてるけど、もと二本立ってたから二本岩って英語では *two sister* だったんだけどね。一本台風で折れたの。それでもう一本しか立ってないけど、一本岩ってゆわかないの。誰も二本岩っていう。一本と一本が半分もないんだよ、片っぱが。水面で切れて、折れてるから。だから潮ひけばこれぐらい出るんですよ。潮いっぱいだとそれぞれになっただよ。片っぱはまだ満足してんだけど。いや、いろいろありますよ、名前ね…

（Hendrick Savory の面接調査 2003年9月21日、図2-8）

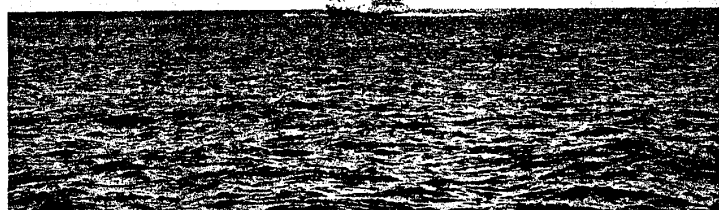


図2-7 一本しか残っていない「二本岩」

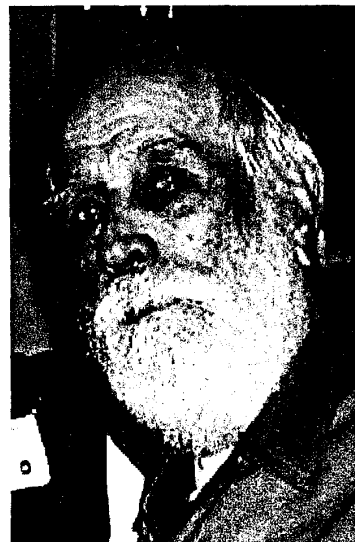


図2-8 Hendrick Savory

3. 小学校の英語教育の現状：報告と分析（南谷 奉良）

3.1. 小笠原小学校の教育

本節では、小笠原小学校の英語教師を務める Mark Stone の面接調査を紹介し、彼が行った 2006 年 9 月 4 日の英会話授業の概要を記述する。またその指導方法の分析を試み、生徒の学習状況を報告し、第 2 節で示された小笠原での英語教育の方針が現場においてどのように実現しているかを示す。

3.1.1. Mark Stone 教員の面接調査：おがさわら丸（ロング、新井、南谷、橋本、堀内）

Mark Stone はイギリス、マンチェスター出身で、面接当時 31 歳である。彼はイギリスを離れて 10 年間、イタリア、スペイン、チェコをまわり、英語教師の仕事で生計を立てている。2003 年に訪日。面接当時は夏季休暇中であったが、2006 年 4 月から小笠原小学校、小笠原中学校で英語を教えている。去年までは別の先生が教えており、現在は交代教員として勤務している。サーフィン仲間から小笠原父島の存在を知り、インターネットで公募されていた講師の仕事を見つける。東京で面接を受けたが、教育委員会から特別な教育指導方法を伝えられてはいないとのことである。彼は小笠原ことばや混合言語など、小笠原の文化に関心があるというよりは小笠原の自然に魅かれているとのこと、小笠原というより、標準日本語に興味をもっている。日本語は独学で、友人とのコミュニケーションから学んだ。（ナウシカ、ワンピースのマンガ）

授業時間は 1 コマ 40 分程度、小学 1 年生から 4 年生まで、中学生は 2、3 年生を対象にしている。小学生にはコミュニケーション中心の授業、とくに名詞、動詞、数。挨拶やかんたんな疑問文の初等英語、「What's up?」や「How are you?」などの口語表現も教えている。教育指導としては「fun communication」であり、音楽やダンスをとりいれている。テキストは特に使わず、写真をつかう場合はインターネットから授業のトピック（food, vegetable, fruit）に沿った資料を選んで紹介している。

日本語をある程度習得してからは、授業に日本語をとりいれるようになった。生徒とは廊下で会えばコミュニケーションをとるが、もっぱら日本語で会話する。その時に会話する英語は「How are you?」や「Do you like ~?」などシンプルなものである。

中学生には現在完了等、文法知識を教えている。テキストはないが、他の教師が用いている教科書の進度にあわせている。発音は日本語の音韻体系に抑えられた、ぶつ切りの英語ではなく、「I've been to America」ならば、ネイティブ・スピーカーの英語に近い音の節約と省略も教えている。

小中ともにクラスは 9 人～15 人、男女の人数は同程度。ただし、生徒の数が少ないからといって、個人の名前を覚えているわけではなく、名簿をみて名前を確認している。名簿には欧米系島民に特徴的な名前を姓にもつ学生がいる。W 家の小 3 年生と S 家中 2 がいる。W 君は西洋系の顔立ちだが、特に英語が得意であるわけではなく、英語の授業ではシ

ヤイだという。W君は Stone に同じ顔立ちということで興味を覚えており積極的に（日本語で）話しかけてくるそうだ。彼はイギリス英語を用いるが、授業では英語のバラエティを教え、アメリカ英語やオーストラリア英語も紹介している。英語教育の経験上では・スペインやイタリアと比べても、小笠原のこどもたちの学習速度に顕著な違いはみられないとのことである。

小笠原の仕事が終わった後は、内地へ戻ることを希望している。理由は、「小笠原には日本の感じがないから」、「日本を知りたいとおもったら内地へ行く」であり、日本を離れた後はニュージーランドに行くことを希望している。



図 3-1 写真左から南谷・Mark Stone・新井

3.1.2. 小笠原小学校小3英会話の授業メモ（調査者：新井・南谷）

以下は調査日当日に記録したメモを記載した。まず授業の全体的な流れを確認してみる。

校庭では紺の帽子を被って、体育着を着た中学生の体育の授業が行われ、屈伸運動をしている。二見湾を望む小学生の教室（図 3-2）には、2つならんだ席が4つ、8人2行×3列で24人の生徒。机には筆箱だけしか置かれていない。椅子は6～8号、117～130cmと124cm～137cmの椅子。上履きは色が青、白、黄色と統一されていない。全員半袖でハーフパンツ。廊下側の壁には掲示板があり、「自分たちで考えた係だよ」というコーナーに、「黒板がかり」、「牛乳がかり」、「体育がかり」、「くぼりがかり」、「ごみすて」、「たすけがかり」

がある。



図 3-2 二見湾を臨む小笠原小学校の教室、写真手前が校庭

英会話の授業が始まる。Stone が 3 つの質問 (3 questions : What's your name? How old are you? Where are you from?) を生徒に尋ねる、どの質問も文字にせず、音声のみで理解させる。生徒はノートにカタカナで翻訳をすることもない。教室には担任の日高泰人先生が補助をしている。

Stone が黒板に数字を書く。8、80、800、8000、80000、800000 と数を増えていき、英語での数字の表現を教えていく。800000 に到達すると生徒たちが興奮し「何だあれ！」と叫ぶ。0 がいくつあるかで eight, eighty, eight hundred, eight thousand, eighty hundred, eight hundred thousand と英語を発話させる。一番うしろの席にすわっている U 君はこちらで判断する限り、クラスで一番英語ができる。Stone が「What number is this?」と数字をかいたカードを掲げると、彼が最初に答えを叫ぶ。59 を 46 とまちがえて答えたときは、ひとりごとで「うわあ、なんちゅうまちがいしたんだ」と頭を抱える。大きな返答の中で 31 を「three ty one (*)」(スリーティワン) と答える生徒がいる。

次はゲームの時間に移り、「snakes and ladders」が始まる。へびとはしごの絵が描かれ、数字のマスが書かれた紙が配られる。蛇は「down」はしごは「up」と Stone がルールを教えていく。英語でジャンケンをしてグーで勝ったときは 1、チョキは 2、パーは 3 進めるルール。かけごえは「ワンツースリー」と拳を振って、「ロック、ペーパー、シザー」(本来は

シザーズ)を選ぶ。あいこになったときは「ワンツースリー」を繰り返す。ジャンケンに勝った生徒は、勝った手の数ぶんだけマスを進める。じぶんたちの位置の標識として生徒たちは消しゴムを使用している。止まったマスに書いてある数字を英語で表現できればクリアとなり、ゴールを目指していく。

5人グループをつくるように Stone が指示すると、すぐに仲間うちで集まるこどもたちがいる一方、グループをつくれずに不安そうな顔をする生徒たちが角の席に座っている。日高先生が彼らのグループ決めを調整する。最初はまじめにゲームを行うが、次第に肝心のルールが無視されて、最終的に誰がじゃんけんに勝ちゴールに到達するかという流れになるため、Stone や日高が補助をする。ゲームの終わりを「終わリー！」と Stone が告げ席を戻させる。

再び、復習として 3 questions に数の表現を加えて 4つの質問を聞き返す。先ほどまでは音のみで理解していたため Stone の質問の意味を多くの生徒が忘れていた。例えば少し変則的な「Where am I from?」(正解は England)と Stone が尋ねると、「Where are you from?」で記憶していた生徒たちは当惑してざわめく。

Stone が「English lesson is over.」とあって、それに対し、生徒が「See you tomorrow!。」と合唱する。日高が日本語で補足して「恥ずかしがらずに声をだせば、覚えるから」と生徒に告げて授業は終わる。

3.2. 英会話授業の分析

上で確認したように、英会話の授業は Mark Stone が主任講師を務め、補助教員として日高泰人教員がつく。授業は夏季休暇直前に行った内容の復習から始まる。調査日当日の授業は以下の 3つの質問を復習しながら、教員と生徒だけでなく生徒同士のコミュニケーションも図られた。 1 What's your name? 2 Where are you from? 3 How old are you?

3.2.1. 3 questions:例示→練習(集合/個別)→実践(対話)

会話は全て音声のみで行われ、生徒は机の上にノートと筆箱しか置いていない。授業は 3 questions の例示(指導)から始まる。Stone が自ら「What is my name?」-「Mark.」と例示してみせる。

例示を終えると、今度は生徒たちに向かって質問する。例えば Stone が「Where are you from?」と尋ねると、生徒たちは「Ogasawara」や「Japan」とそれぞれが答える。このように生徒たちは質問の意味がわかれば各自答えを発話する。これが授業の「集合的な練習」部分となる。生徒たちは答えを間違えたとしても生徒全員の「合唱」の声にじぶんの声が消えるので積極的に授業に参加できることが窺える。

集合的な練習が終わると、Stone は生徒を彼の前に一列に並ばせて、一人一人に個別的な質問を尋ねる(個別的な練習)。この時、Stone は生徒たちの顔を見て話しているが、生徒たちは恥ずかしそうに顔をそむける。「Face to Face」の異文化を伝えることになると考えら

れる。

次には生徒間で対話を行わせる。隣り合う席の生徒たちに3つの質問と返答を行わせる。これが実践部分となる。

3.2.2. 抽象的な数の表現

新しい質問「Question number 4 : What number is this?」が導入され、Stone は黒板に8の字を書いて、自ら「eight」と例示してみせる。この質問を教えるとき Stone は音の分節を教えるために指を折って、「What, number, is, this?」と教える。8の次に80、800、8000(黒板に記述する際には、「8,000」の区切りのコンマを省略)と続くところまでは生徒たちは難なく理解しているようだった。しかし、80000に到達すると、区切る地点が増えたことで理解が遅れる生徒がではじめる。Stone が80000を英語で尋ねると、「eight thousand」「eighty thousand」「eight hundred hundred(*)」の答えに分かれる。次には千の区切りを教えた上で、800000を尋ねる。区切りのコンマを、数字を手で隠すことで教えていく。また8 (eight) と80 (eighty) の発音の区別を丁寧に教えていく。ある程度練習が行われると、Stone は黒板に書かれた一桁から六桁までを暗誦させる。一つ一つ消していく。生徒たちは神経衰弱のように数字のあった箇所を指差され、そこにあった数を答える。次には2桁のカードを掲げて、全員に答えを合唱させる。

練習が終わると実践に移り、Stone が生徒たちを一行に並ばせて、一人ずつ数の質問をし、生徒が答えられるとそのカードを渡していく。カードを渡された生徒は再び列に並び、今度は渡されたカードを Stone にみせて、質問(What number is this?)をする。ここでも質問と答えに両方を生徒に体験させる。

3.2.3. 抽象的な数から具体的な数の表現へ

4 questions (What's my name? How old am I? Where am I from? What number is this?) の復習を行い、抽象的な数(カードに書かれた数)と具体的な数(年齢)の概念を合わせて行く。日本語では抽象的な数と年齢の表現に相違がみられることもあるため(8歳を「やっつ」と表現することなど)、英語ではそれが変化しないことが生徒たちに了解されると考えられる。

3.2.4. Snakes and ladders のゲーム

ルール: Rock, paper, scissors の掛け声からはじまり、つづけて one two three のタイミングで手を決める。Rock は1、paper が3、scissors が2を表し、勝てばその手数だけ駒を進めることができる。へびは下り、はしごは上がる。勝った者は進んだ先のマス目にある数を英語で答えなくてはならない。

Stone が黒板にへびの絵を書き、「What is this?」と尋ねる。生徒たちの多くはその絵が分からず、地図と認識したのか「England」と答える生徒もいる。また興味深いことに Stone

が黒板にはしごの絵を書いたときに、その絵を見て「ヤシの木！」と答えた生徒がいた（図3-3）。その絵は、ヤシの木の幹部分に似ているからだが、環境を反映した小笠原特有の感性が窺える。ゲームの指導には Stone と日高が立会って指導を行う（図3-4）。

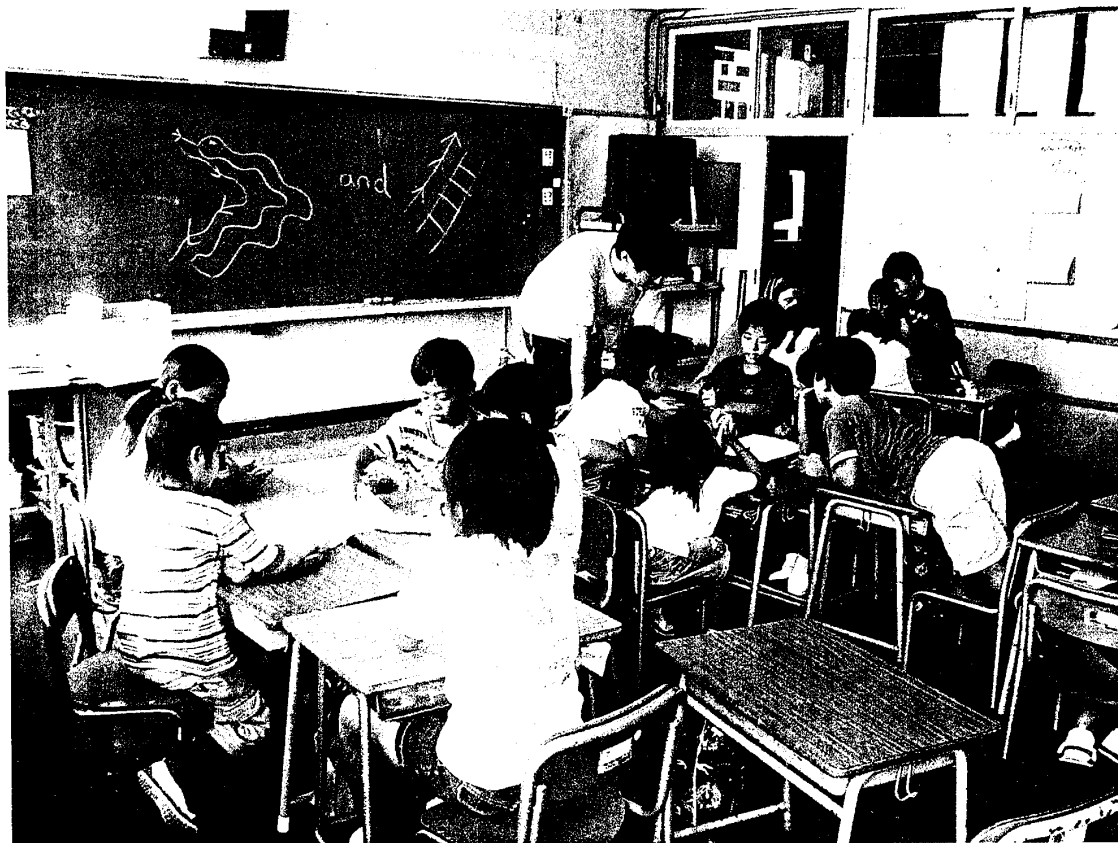


図3-3 黒板左がへび（イングランド）、右がはしご（ヤシの木）。
立っている教員が日高泰人、Stone は奥で生徒たちに指導している。



図3-4 日高教員と生徒たち

ゲームが終わると席を戻させて、再び4つの質問の復習を行い、授業は終わる。授業の

全体的な流れを見ると、例示→練習→実践→ゲーム→復習となるが、生徒たちが授業に飽きている様子は見受けられず、「fun communication」が実現されていると言える。また生徒と教員、生徒と生徒が会話を交わすことで、学習から離れ、コミュニケーションとして英語が教えられていると言えるだろう。

3.3. 小笠原小学校の英語景観教育

第2節で触れたように、ある言語を学ぶときに、その言語（ことば）とレアリア（ことばの指示する実物）が近くにあることが重要であるが、小笠原小学校では校内の言語景観においても英語教育を実践し、トイレや職員室、理科室、図書室など、教室の札に英語が記されている。図3-6の「女子トイレ」に見るように、日本語が記されていないことも特徴的で、生徒たちは英語でトイレを認識する常態環境の中で学ぶことができる。図3-5は小学校職員用玄関に書かれた歓迎の英語表記。

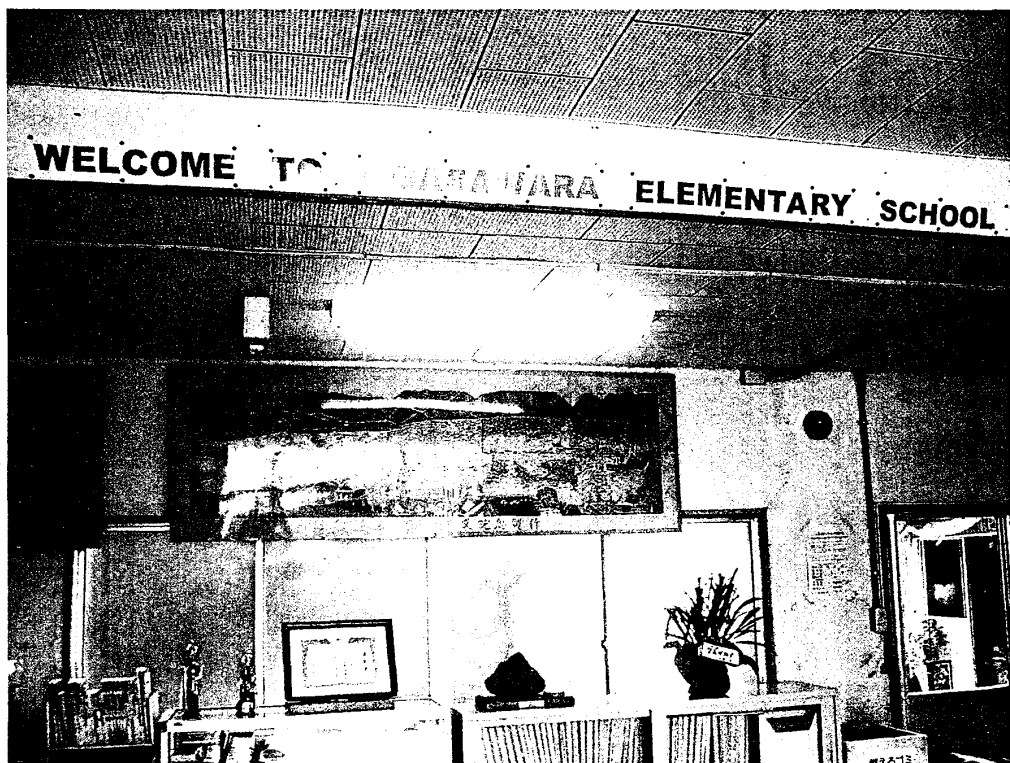


図3-5 小笠原小学校職員用玄関



図 3-6 女子トイレ

また教室の表示だけでなく、英語学習の掲示板（図 3-7）も用意されている。確認できてはいないが、おそらく Mark Stone による掲示板だと考えられる。新聞の切り抜きやキーフレーズ（図 3-8）などが紹介されている。この掲示板は生徒用玄関そばに設置されている。

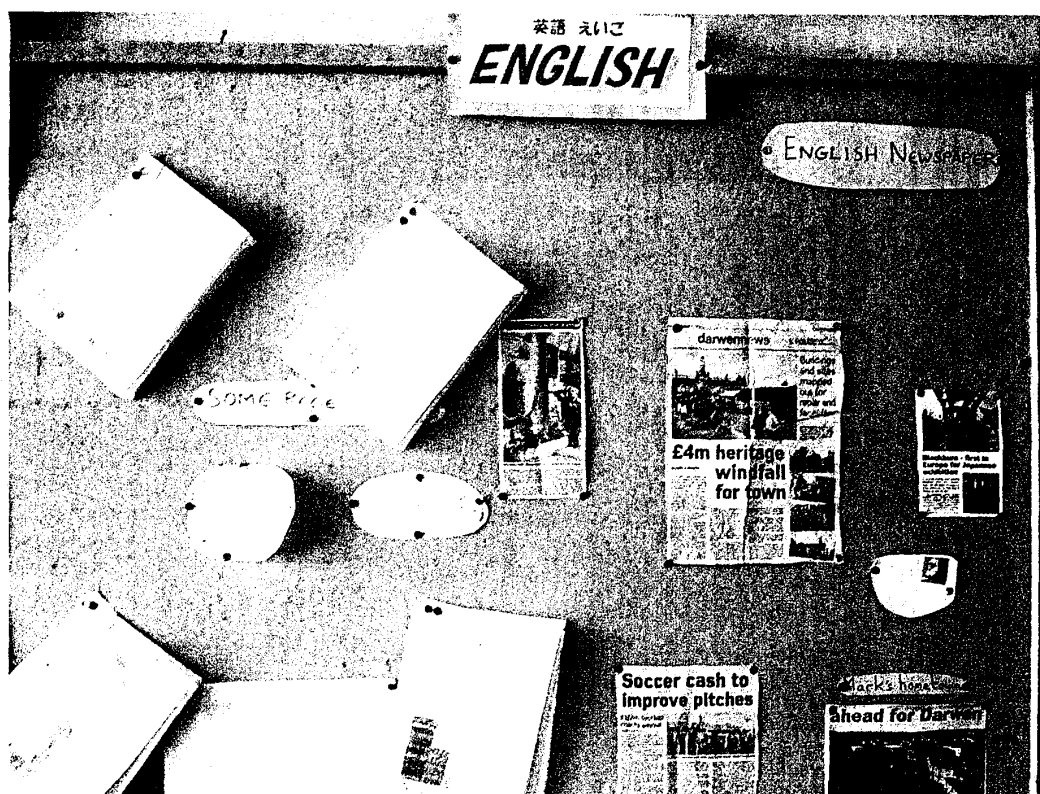


図 3-7 英語学習の掲示板

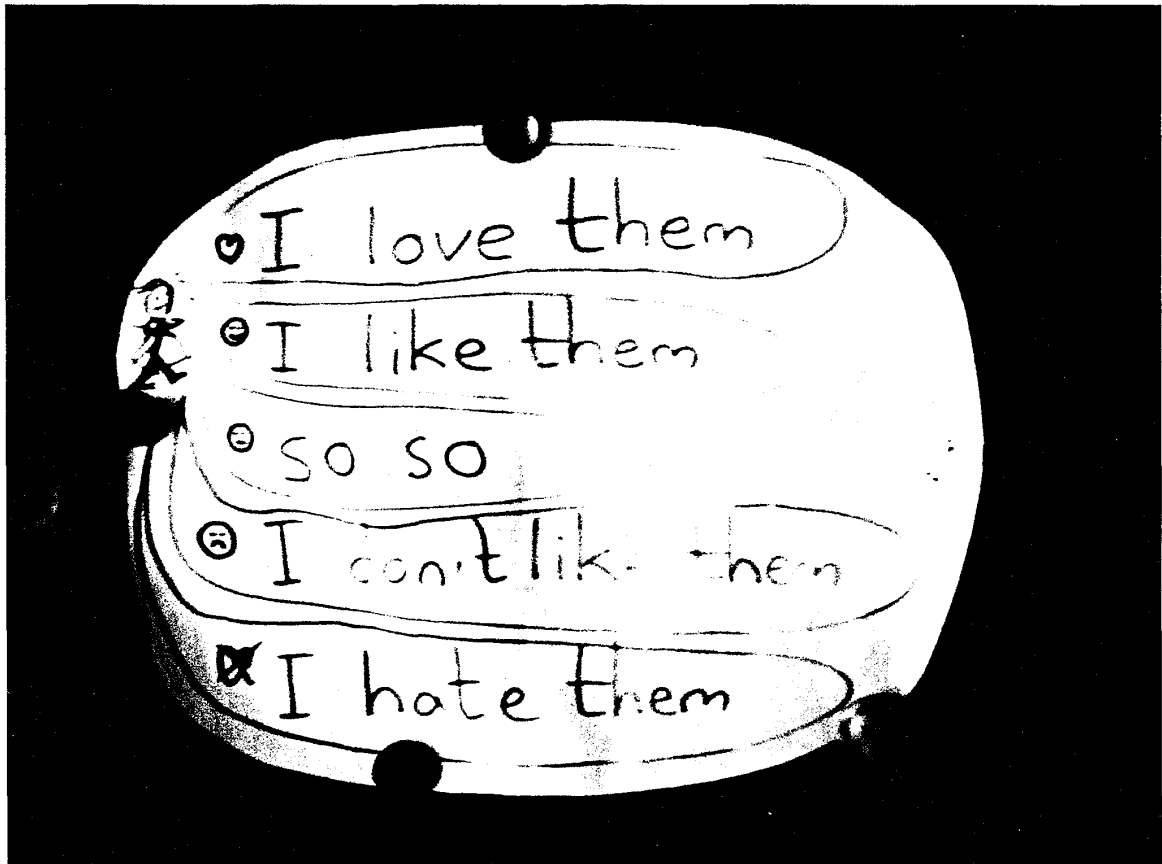


図 3-8 英語のキーフレーズ

このようにして小笠原小学校では教室だけでなく、言語景観としての英語教育も推し進められている。より自然な環境に言語を置くことで生徒たちの学習態度にも変化が期待されるはずである。第 2 節で示されたような小笠原の言語改革を推進するのであれば、校内だけでなく、外の自然にも英語があればと望まれる。はしごを「ヤシの木」と答えた生徒がいるように、小笠原の児童たちは彼らの環境を反映しながら事物を観察しており(図 3-9、3-10)、複数の言語による世界の記述はより豊かな観察能力を彼らに与えると考えられる。今後小笠原が外国の人々や内地の人々と接する機会が多くなるとして、彼らに限られた土地の中で複数の言語が許されうることを見逃せない事実である。多言語であった小笠原の歴史を生かした英語教育が実現されているのであれば、小笠原ことばや混合言語も学ばれることが期待される。



図 3-9 昼食時の途中下校する小学生



図 3-10 排水溝のカエルを発見した下校途中の小学生たち
写真手前ハイビスカス、写真左手奥トックリヤシモドキ

4. 中学・高校の英語教育・国語教育の現状：報告と分析（張 衛良）

4.1. 東京都立小笠原高等学校英語先生へのインタビュー

インタビュー：下川、ゼイ、張、ロング

2006年8月28日（月）am10:00頃 おがさわら丸船内C1ルームにて

伊達 丈浩（だて たけひろ）、東京都立小笠原高等学校の英語の教師。34才、配偶者は韓国人、2006年4月から都立小笠原高校で英語教員を勤めている。小笠原に来る前は、国立国語研究所で働いていた。東京外大[朝鮮語]卒業後、韓国で修士課程修了。



図 4-1 おがさわら丸で伊達丈浩の面接調査を行なう張、下川、ゼイ

4.1.1. 現状紹介

生徒。高校全体で40人ほどの生徒で、1学年10人強である。高校の生徒は標準語で話していて、小笠原ことばはまったくみられない。

家庭環境。生徒たちの親は小笠原が好きで、島にやってきたという人もいる。このあいだの小笠原返還祭（35周年）でインタビューを行ったが、「返還前は何をしていたか」と尋ねたところ、35年前、この島にいた人はほとんどいなかった。今島にいる人たちはほとんどが東京など内地の各地で暮らしていたという。その結果、移住者が多いため、ことばをたくさん島に持ち込むことになったそうだ。

かつ、英語が使われていたはずの小笠原だが、生徒たちからやはり期待しているような

ことば（英語）は出てこないようだ。名前をみればW君とかS君といった欧米系の名前があるが、「W君の母親は英語を使うが、彼は使えない。S君は小さい頃は英語をべらべらとしゃべっていたそうだが、現在はしゃべれない。」

教員。教員は通常に人事異動が行われているので、内地から行ったりきたりする機会が多い。また、10年前までは余暇の時間の使い方は自由だが、少し変わってきている。例えば、かつては、アイルランド語学専門の英語教員がいた。職員室でアイルランド語の本を広げて、余暇に自分の研究に没頭していたが、今そうしたことは無理になった。またカリキュラムの自由もなくなり、毎回進捗報告書を提出する必要があるそうだ。小笠原の場合は、米軍時代以降、生徒も教員も昼休憩「12時10分から13時半」の間、昼ご飯のために帰宅していたが、現在、「生徒が学校に早く戻ってくる可能性がある」ということで、13時までに学校へ戻らなければならなくなった。それに鶴田教頭によると、小笠原の場合は教員数が少ないため、様々な業務をこなさなければならない。

4.1.2. 授業

授業時間数。先生がもっている授業は内地と違う。内地と島では週18回と12回という違いがある。今年から進度別にクラス[上級と基礎]を分けたため、週15回という変更になった。高校進学の際には約半数の[進学を目指している学生]生徒が内地の高校に進学する。また、今年からの入学生の英語授業は週6回に変更した。[1コマ50分。]これは昔のアメリカの授業に沿おうとしているからだ。東京のシステムがそのまま輸入されているところがある。

教科書。内地と同じものを使用している。授業では、音楽も使う。音楽、美術授業も同じである。[先生は非常勤である。]

参考書。問題点としては問題集を買えないという状況。内地の高校に進学しなかった生徒が2、3人いるが、彼らは内地に行った際にまとめて参考書・問題集を買ってくる。インターネットで参考書は買えるが、小笠原でのネット回線速度が電話回線のためとても遅い。1cmずつ帯状に映像がでてくるという状況なので、アマゾンで購入するにも一苦勞である。ADSL回線がない。

4.1.3. 学校行事

運動会。小中高合同開催している。中学生が踊りを踊るが、小笠原エイサー踊りを行う。(エイサーというネーミングに対する反対意見もあったようである。)

旅行。夏休みには内地へ行く。なぜなら、「島にいと、行き詰まるから。」と感じているそうだ。地上の楽園というイメージとは異なる。夏休みの内地への旅行が毎年の恒例行事となっていることも多い。内地に行くことによって、また、東京のことばに磨きがかかるそうだ。

4.1.4. 総合学習

高校で最近では自由なことをやる時間が週 1 回で、総合学習が行われている。うれしいことに、小笠原のことばをテーマとして研究することになった。希望している子供も何人いる。去年は小笠原高校の起業、国語の先生がことばについて何か書いていた。[内容は外に発表されていない。]

4.1.5. 生徒の生活

部活。料理部、テニス部などがある。内地と違って放課後は自由である。ピーデ祭[小笠原高校の文化祭]のときは1ヶ月だけみんな音楽部に入って、バンドをやる。自由な空気がある。

入港日・出港日。生徒は入港日には荷物の下ろしバイト[時給 800 円]をしている。そのため入港日の部活動は休みである。入港日は小笠原では特別な日なので、生徒が忙しいと委員会が中止になったりもする。出港日に南洋踊りを披露しておがさわら丸を見送る時もある(図4-2)。

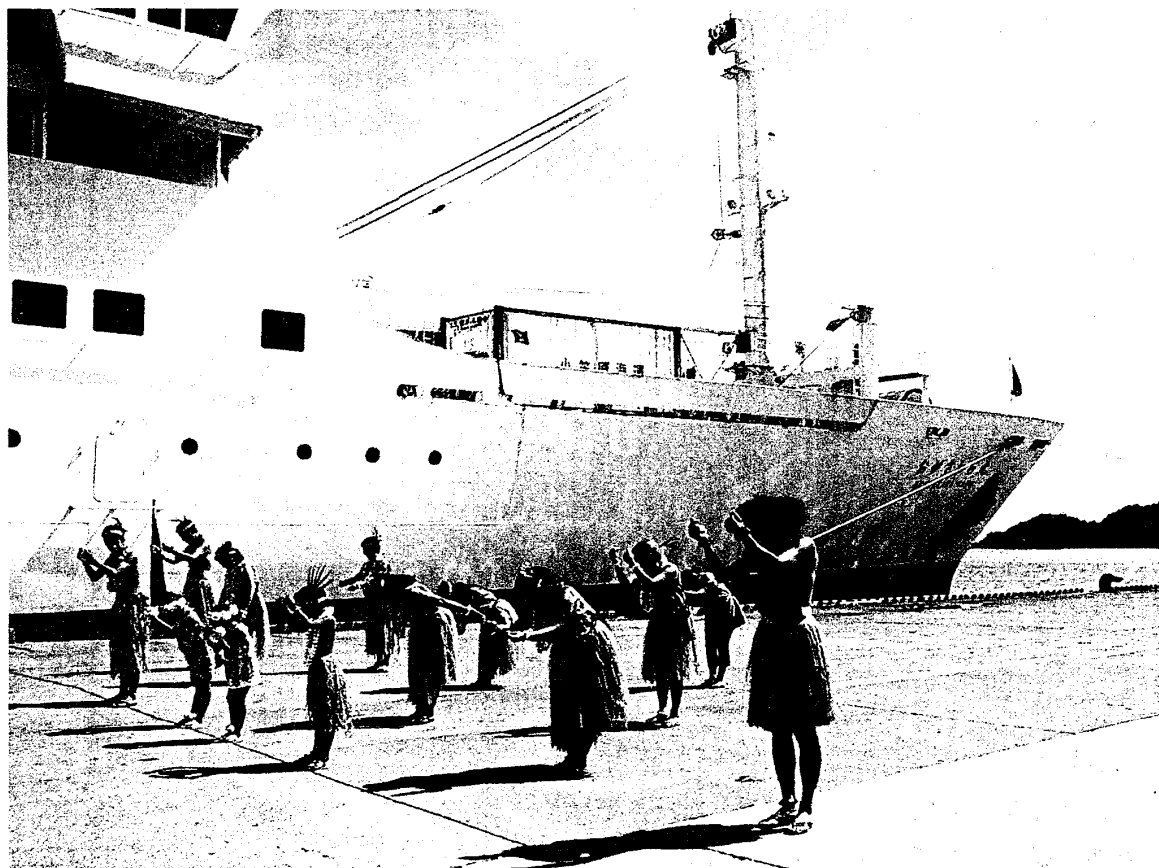


図4-2 おがさわら丸を南洋踊りで見送る大人と子供

通学。島の生徒はバイク通学が許可されている。
昼休み。昼休みは12時10分から13時半まで。

昼休みに家に帰り、家で昼食をとる。[米軍時代からの習慣]「ガソリン代がもったいない」[家から距離があるため]という生徒たちは弁当を持参している。

子供たちの遊び。高校女子：思春期のため、それほど海に行かない。小中学生の時はよく海に行く。高校男子：海によく行く、タコをつかまえる。ビーデ祭のたこやきは、生徒がつかまえてきたタコだった。中学生：なまこでキャッチボールしたり、鹿をおびやかしたりする。小学生：規則—「小学生は3人一緒なら海にいてもいい」という決まりがある。保育園：(奥村)にはプールがあり、6～11月まで利用できる。保育園にいくと、島の雰囲気作りがある。夕方の散歩がしたり、海に行ったり、小港に車で行ったりする。山にいて、パッションフルーツをとってきたりもする。父島は閉鎖的ではない。

その他。星空観察会、音楽会などを開催。18時や18時半スタートにしても早い時間帯なのに人が集まる。残業はほとんどなく、家にすぐ帰る習慣になっているからなのではないか。

情報源。テレビの影響で子供たちは本を読まなくなった。子供たちは本を読まなくなったが、関心はある。図書館[福祉センター/学校]で年3回購入希望書籍を募ったところ、かなりの数の要望があった。本屋はないが、生協には雑誌がおいてある。ダニエル・ロング著の本もある。生徒は新聞を読んでいないようだ。[約1週間分を船でまとめてとどくという状況なので読む気がそがれてしまうのではないかと考えている。] 情報源はほとんどテレビだけなので、国際問題についてはほとんど知らないのではないかと心配である。

4.1.6. 意識

島意識。小笠原と内地、どちらに住みたいかという質問を生徒にすると、小笠原に住みたいと応える子供が結構いる。

小笠原ことば意識。小笠原では大切にしようというとき、自然ばかりに目が行き、ことばには関心がむかないようだ。それで、ダニエル・ロング著の『小笠原ことはじめ』をテキストに使っているが、生徒は理解できていないようだ。だから、外来種の植物だけでなく、外来種の言語にも関心を持ってほしいという。

4.2. 小笠原村立小笠原中学校英語授業参観

参観授業：中学2年生英語授業

参観時間：2006/9/4(月) 2時限目

担任先生：新保 あゆみ(しんぼ あゆみ) 女性

生徒数：9名(男子：6名、女子：3名)

参観者：下川 明日美、橋本 早帆

授業内容：英単語テスト100問

授業流れ：

1. 先生と生徒互いに挨拶と日常会話

「Good morning」、

何曜日「Monday」、日付「September, 4th」、天気「sunny, humid」

以上を黒板に書き出した

2. 英単語テストの準備時間について

先生が英語で「何分間必要か？」と質問

生徒が各自「twenty minutes」「thirty minutes」など答えた

最終的には先生が「just ten minutes」と答え、各自テストに向けて直前準備事に配られていたプリントから合計 100 問。⁷

3. テスト時間について

Mark Stone 先生[生徒からは「ミスター」と呼ばれているらしい]は 20 分と言っていたらしいが、100 問テストなので 30 分 (9:35~10:05) に延長。最終的には 5 分短縮されて、10 時まで。

4. 10 時に回答用紙を回収。同時に宿題ノートも回収。

5. 英検の知らせ。問題集入手困難のため、図書室に問題集が置かれている。2 年生で 4 級合格が目標。3 年生で、準 2 級合格者もいるらしい。

6. 残り時間は次回の授業のお知らせ。単語の意味調べをやってくること。次回の授業では夏休日記を書く。

4.3. 小笠原村立小笠原中学校国語科授業参観

参観授業：小笠原中学校 2 年生国語科

参観時間：2006/9/4 3 時限目 (10:20~11:10)

担任先生：森山 富佐子 (もりやま ふさこ) 女性

生徒数：9 名 (女子：3 名 男子：6 名)

関連人物：小笠原中学校校長 前田 渉 (まえだ わたる) 先生 男性

記録：堀内 みき ビデオ録画：ゼイ艶 写真撮影：張 衛良

授業内容：教科書作品：「盆土産」 作者：三浦 哲郎

授業目的：文学作品鑑賞

授業流れ：

1. (10:20~) 参観者の自己紹介

2. (10:25~) 授業意図を伝え 背景知識の紹介 (日本語ブームの影響で教科書に再掲載されたこと)

3. (10:30~) テープの朗読素材を生徒に聞かせた。

作品の中で「優しさと暖かさを感じるところ」「悲しさを感じるところ」を、生徒に、それぞれ色を変えてマーキングさせながら、教科書の文章を目で追わせた。

⁷ マスありの穴埋め式だった模様、テストは 60 点以上合格で、合格するまで再試

4. (10:50～) 朗読を聴き終わり、先生から「話の中で印象に残ったことばは？」という質問に対して、生徒は「エビフライ！」と答えた。⁸

・次に「エビフライの持つ意味は？」という質問を生徒から与えられた。作品の時代設定はいつか、どこなのか、などの質問も与えられ、その時代や、背景設定に関して、生徒たちに想像をふくらませた。

・先生から、「小笠原では～～だけれど、この作品では～～ですね。」というように、自分たちの環境と、文学作品の背景の違いに気づかせることが狙いのコメントが目立った。発問に対して、生徒たちは挙手をしえ起立し答えるのではなく、挙手なしで椅子に座ったまま返答する、という形式であった。

5. (10:55～) 生徒からの自由発問のあと、「やさしさ、あたたかさ」を感じさせる箇所を、先生からヒント出し、生徒に再考させた

6. (11:00～) 生徒一人一人を指名し、考えたことを生徒全員に発表させる。

どのページの何行目のどこにやさしさを感じたのか、尋ねられる。

感じたことの根拠を文章から指摘させていた。生徒の発言を膨らませたりしながら、全員の発言を聞いていた。

7. (11:10) 授業終了

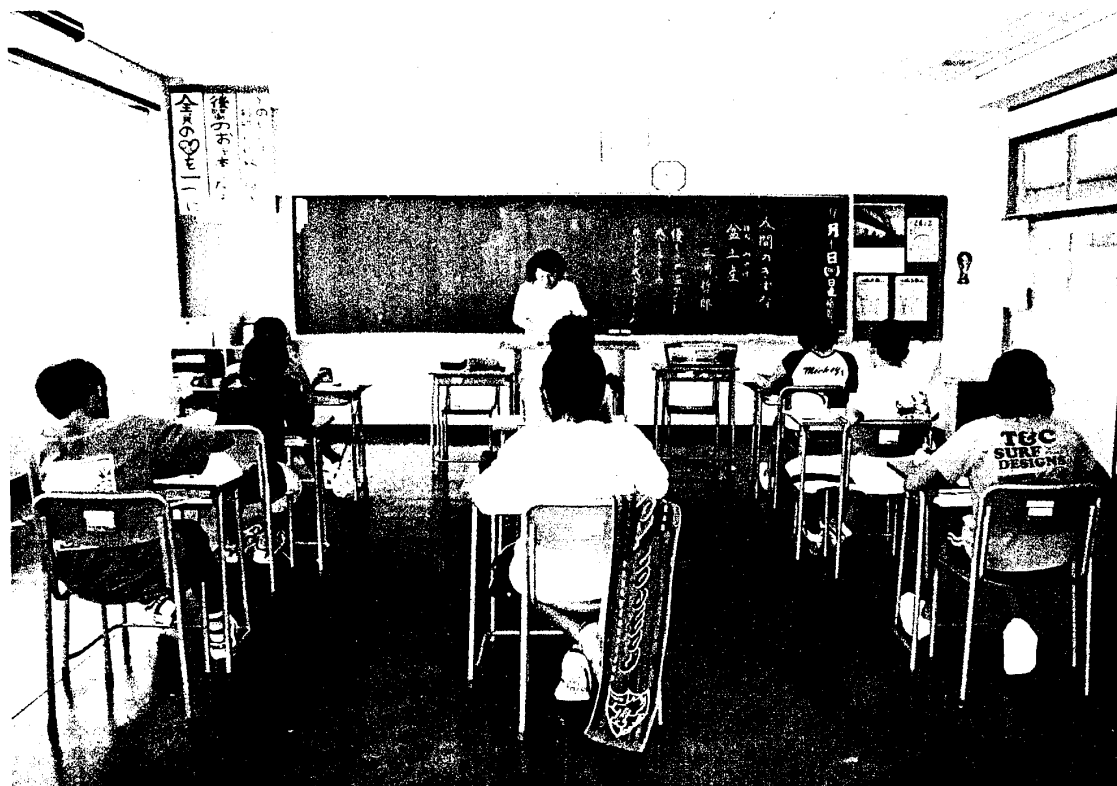


図 4-2 小笠原中学校国語授業風景

⁸ 「盆土産」という作品は、東北から東京に出稼ぎに出かけた父親が盆に帰省する際に、東京から「エビフライ」を土産に持ってきた、という設定で始まる話である。

4.4. 授業終了後、森山先生インタビュー（堀内 みき）

4.4.1. 小笠原言葉について

- ・ 国語科の授業としては、教科書に従って授業をするので、小笠原ことばや小笠原についての素材を取り上げない。
- ・ 中学三年の総合演習の時間で小笠原ことばについて取り上げようかと予定している。
- ・ もともと島に住んでいる家の子供、内地から来た子供、母親か父親が小笠原出身子供など、様々な背景の子供がいるが、今子供達が使っている「言葉」という点に関しては大分内地化されている印象を受ける。

4.4.2. 国語科授業について

- ・ できる限り、生徒が自由に発言しやすい空気を作るように心がけている。

4.5. 前田先生インタビュー（堀内 みき）

少人数教育について（主にデメリットについて）

- ・ 集団で何かやる、という観点からすれば、これは少なすぎる人数である。
- ・ 中学から次の集団に移ったときにうまく適合できるか不安。
- ・ あまりに生徒数が少なすぎると、先生が生徒に手をかけすぎてしまったりする。
- ・ 生徒同士の競い合いという観点からしても、9名という人数は少ない。

4.6. 授業の印象

・教科書の素材を扱った授業だったので、「小笠原らしさ」はあまり感じられなかったが、教室内の飾りつけ（「7月の目標：遠泳大会で全力をつくそう」など）には小笠原らしさを感じた。発言をするときは挙手をせず、話し始めるというスタイルが中学では珍しいと思った。（堀内）

・テープを使って文学作品を味う授業だったが、学生人数が少ないためか活力が少なかったと感じた。授業内のやり取りでは小笠原ことばの使用はなかった。授業内の説明の中で小笠原特有の現象を例（冷凍食品は内地から25時間経て手に入れる。）として説明を入れている。（ゼイ）

授業の流れとしては、前半はほとんどテープを流す時間に費やされました。テープを流した後、生徒に質問し、答えてもらう時間を入れると、後半の時間の大部分が消えてしまいました。全体的なイメージとして、授業は静かな空気が溢れます。授業を進めるには、小笠原ことば色があまり感じられませんでした。（張）

5. 小笠原の情報化（下川 明日美）

5.1. 小笠原のメディア

本節では、電話そしてインターネットをはじめとする通信手段の小笠原における歴史、現状をみていきたい。

小笠原は明治時代よりその位置上、日本の国防上重要な地域と見なされてきた。1906（明治 39）年には、父島に本土とグアムを結ぶ海底ケーブルの中継局が設置され、1914（大正 3）年には海軍無線電信所が設置された。このような第 2 次大戦前の通信ネットワークインフラ整備はあくまでも国防上のものであり、民生用ではなかった。戦後になると、1968（昭和 43）年の返還前は米軍司令部と米軍宿舎間を結ぶ電話だけであり、本土とのツ子音連絡は閉ざされていた。返還後、日本電信電話公社（現 NTT）により、電話・電報の業務が開始されることになり、1968（昭和 43）年 9 月 15 日に父島島内での電話が開通し、翌 1969 年 3 月 31 日から父島本土間の電話が開通した。母島においては、1977（昭和 52）年 12 月 23 日に本土との電話連絡が可能となった。しかし、この対本土間の電話連絡はあくまでも手動交換による待時通話方式であった。

そして 1983（昭和 58）年に打ち上げられた国産通信衛星、CS-2a（さくら 2 号 a）を利用することにより、1983（昭和 58）年 6 月 12 日午前 10 時より、父島・母島ともに全国ダイヤル即時網に編入され、本土と小笠原間のダイヤル即時通話が可能となった。

また一方で、通信手段が固定電話から携帯電話に移行していくに伴い、いったんは解消された通信面におけるあらたな格差が生じていた。それが 1999 年 4 月から、父島の大村地域において NTT DoCoMo が使用できるようになり、同年 12 月にも母島で利用できるようになった。

5.2. 小笠原の IT 化

小笠原村の情報化は、平成 11 年総務省（旧・郵政省）における国の補正予算事業による地域イントラネットに立候補したことからはじまる。しかし現在も NTT の衛星回線しかないとため ISDN の 64KB 回線が最大である、また小笠原村の専用回線を確立させることも考えたがここでも最大 128KB しか出なかったといった要因から本土とのブロードバンド回線が確立しておらず、採択に至らなかった。ここでの国の基準としては 1.5MB 以上の速度の回線が必要とされていた。また人口 2,400 人という規模の中で総予算 7 億というのは費用対効果の面でも国の補助事業として採択されるには難しいところがあった。

その後立地から言っても、情報化という政策は避けて通れないものであったため、平成 13 年度に「小笠原村地域情報化基本計画」が策定された。そして平成 14 年度より、国土省による小笠原諸島振興開発計画（小笠原諸島・奄美大島に対する特別立法）が立案され、島内インフラ整備が振興策のひとつとして実施されるに至った。

その中のひとつとして地域情報化がスタートした。平成 14 年度に小笠原村情報センターを作るための計画を立案し、平成 15 年度から実際にスタートしてきた。平成 15 年度・16

年度で施設整備が行われた。小笠原村情報センターは新築ではなく、もともと返還当時 NTT 局舎としてあったものを譲り受け、改築したものである。

5.3. 小笠原村父島のネット環境

現在情報センターでは、NTT 専用線は公称上り 2MB 下り 14~15MB、実際は上り 0.5~0.7MB 下り 5MB と、J-SAT の衛星回線が使われている。島民は普段 ISDN を自宅で使用しているため、センターでの速度を速く感じるが、内地から来た人にとっては情報センターでのネット回線であっても遅く感じてしまうという現状である。

父島では現在は NTT の ISDN 回線のみしかひくことができない。また、各家庭へのインターネット回線の普及率は 6 割程度となっている。

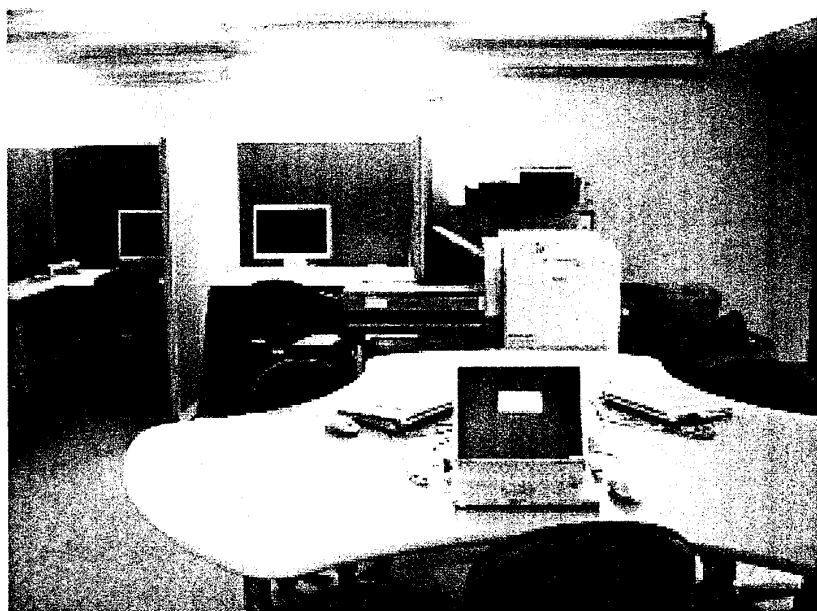


図 5-1 小笠原村情報センター

7月オープンセンターで現在使用者数は1日あたり10人程度である。1時間200円で誰でもパソコン、インターネットをはじめとする施設を利用することができる。その他、セミナー室や研修室などの設備もある。ここのスタッフである情報センター職員は村役場総務課との兼任で行われている。

5.4. 今後のネット環境について

小笠原村では、平成18年度中に各家庭に光ファイバーケーブルをひくという計画が現在進行している。この光ファイバーを用いて、例えば現状では地域によって聞き取りづらいという面もある防災小笠原は街頭にスピーカーを設置するという形から、各家庭に個別受信機を設置するというものにし、より良い形での伝達方法としていく予定である。

また、電波受信をしているテレビ放送を17億円程度の予算によって設置される海底光ファイバーで送信するという案も出ている。現在、テレビ電波受信のためには現在年間3億4～5千万円がかかっており、そのコストは東京都・小笠原村・各放送事業者・村民で負担している。現在も小笠原村民は受信料3000円を支払っているが、支払わなくてもテレビ視聴ができるため未納者が増加しつつある。そして、2011年の地上アナログ放送の終了に伴う、地上デジタル放送の前面放送開始により、テレビ放送に関する費用が年間5億円、ランニングコストとしてかかってしまう。このため、初期投資では高くかかってしまうが、海底光ケーブルを島まで通したいという案が出ている。東京都は財政的にすぐにでも実現可能であるが、地上波デジタル放送への前面切り替えが3年後とまだ時間があるため、しばし据え置きとされている。また同時に総務省により小笠原ブロードバンド化計画が進行している。

この光ケーブル導入に伴い、小笠原村全域に得られる利益が複数ある。まず父島は地震がないため、内地のIT企業のデータセンターやヘルプセンターを設置することが可能となる。ここで新たな雇用創出が見込まれる。また、パソコン関連ソフト制作会社などブロードバンド回線の設備さえあれば、内地からの距離は問わずに仕事ができるIT関連企業を誘致することもできる。これらの職種は基本的に就労時間を問わないため、好きなときに働いて、好きなときに余暇を楽しむということで、小笠原での暮らしを満喫できるのではないかと。

5.5. まとめ

本土における光ファイバーの普及とそれにとまなう様々なメディアの発達にみられるように、インターネットのみならずIP電話をはじめとする新たな通信手段の獲得、またインターネットを介した音楽・映像配信など、光ファイバーの導入は離島であるがゆえの距離的・時間的格差を解消させる大きな一歩となる。複合的なメディアから、今までにはない情報量を享受することになるだろう。それと同時に、発信していく側としてどのように光ファイバー開設によってもたらされた新たな通信手段が活用されていくのか、引き続き継続した調査が必要とされる。

6. 小笠原の多言語情報提供（堀内 みき）

6.1. 小笠原ビジターセンター

6.1.1. 概要

調査者：堀内

調査日：8月30日

小笠原の自然を中心に、歴史や文化を紹介した施設

開館時間：午前8時30分から午後5時まで

休館時間：午前12時から午後1時30分まで

休館日：毎週土曜日及び日曜日 小笠原丸の入港日と繁忙期は土日も開館

入館料：無料

住所：東京都小笠原村父島西町

問い合わせ先：04998-2-3001

対象：地元の方、観光客

6.1.2. 対応状況

- ・展示解説には英語の解説が横に添えられているが、特別展は日本語表示のみ。
- ・英語版のパンフレットを貸してくれる（館外持ち出し禁止）。
- ・英語が出来るスタッフ二名（大好マリ・横山康子）。英語対応はアポイントメントをとることが望ましい。
- ・日本手話のできる人はいないが、手話の講習は受けている。「筆談OK」の紙をエントランスに掲示している。

6.2. 小笠原亜熱帯農業センター

6.2.1. 概要

1970(昭和45)年の設立。小笠原の気候を活かした農業の発展を目指して、熱帯・亜熱帯作物の導入・育成と生産技術の開発、および農業者への技術指導を行う都の研究施設。来島者に小笠原の自然と園芸植物を紹介するため、展示園・展示温室などの施設を公開。

調査者：張・橋本・堀内

調査日：8月30日

入館料：無料

住所：東京都小笠原村父島字小曲

問い合わせ先：04998-2-2104

対象：研究者、観光客は植物園内散策自由。センターとして観光客の対応は無い。

6.2.2. 対応状況

・農業センター自体は研究施設なので、他施設と違い一観光客に個々に対応はしていない。そのため、外国語のできるスタッフはいない。手話ができるスタッフもない。観光に関してはガイドがルートに施設を盛り込み、そのガイドが個々に案内する形で利用してもらっている。

・センター内にある樹木の表示は、ほとんどが日本語表記で、まれに英語での解説が添えられているものもある。センターの一角を再整備する計画があり、今後このエリアの樹木表記に関しては英語解説も盛り込みたいとのこと。

・申告があればパンフレットを配布する（日本語のみ）。

・センターでは、研究者と植物の世話をするスタッフがおおり、後者に欧米系の人がいるが、施設の開設といった専門的な領域に関してコメントする、というような立場には無いため、英語での対応能力はセンターとしては無い。（英語の会話能力があっても、専門的な知識が前提となるため）

6.3. 小笠原観光協会

6.3.1. 概要

商工観光会館、別称 B-シップ

調査者：橋本・堀内

調査日：8月31日

小笠原での各種島内ツアー、宿などの紹介、ガイドブック、パンフレット類の配付を行う。

営業時間：午前8時から午後5時まで 年中無休 おがさわら丸入・出港日には船客待合所内においても窓口業務を行う。

対象：観光客

6.3.2. 対応状況

・観光協会自体の外国人対応はしない。

・英語ができるスタッフはいない。

・英語表記のパンフレットに関しては、村のパンフレット「Ogasawara 父島ガイドマップ」の英語版「2004 OGASAWARA GUIDE BOOK」を配布している。

・日本手話のできるスタッフが一名（花里まゆみ）。このスタッフが休みの日は対応できないが、休み以外の日は随時対応可能。

6.4. ホエールウォッチング協会

6.4.1. 概要

商工観光会館、別称 B-シップ

調査者：橋本・堀内

調査日：8月31日

1989年（平成元年）設立、ホエールウォッチングに関する情報提供、宣伝・広報活動、鯨類の生態調査・研究、教育・普及活動、自主ルールの制定・運用

営業時間：午前8時から午後5時まで、昼休み 正午～午後1時半 定休日：土・日・祭日

出港日は営業、2～4月は無休

住所：東京都小笠原村父島字東町、小笠原村商工観光会館（愛称：Bしっぷ）1階

問い合わせ先：04998-2-3215

対象：ホエールウォッチング客

6.4.2. 対応状況

- ・インターネットに英語版有り（図 6-1 参照）

<http://www.h2.dion.ne.jp/~owa/english/index.html>

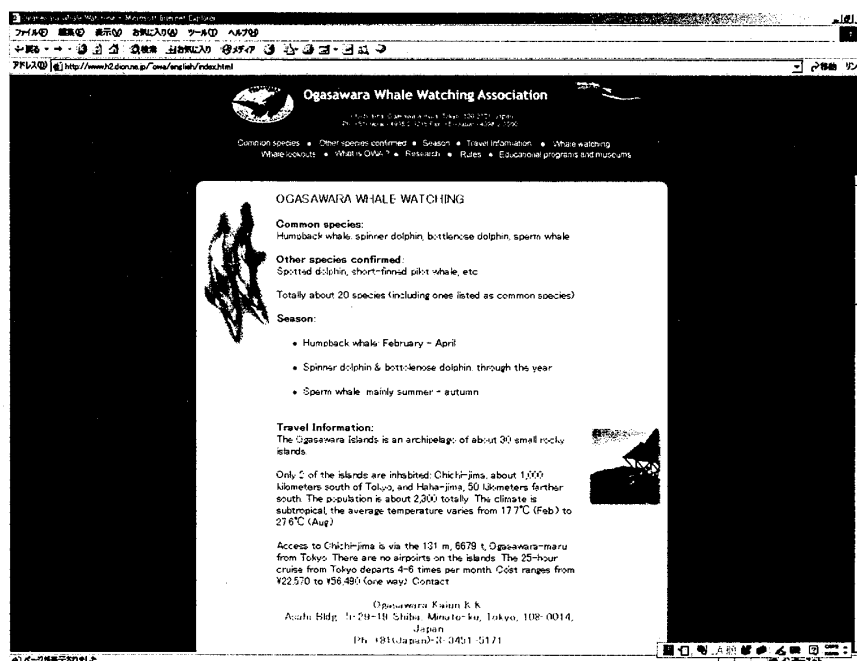


図 6-1 ホエールウォッチング協会英語版 HP

- ・日本語版のパンフレットあり。英語の説明書もある。（図 6-2 参照）以前は数部用意していたが、現在は必要とする人があまりいないため、一部しかない。（外国の人は、以前に来たことはあるが、現在はほとんど来ない。）英語のできるスタッフがいるため、それで済むので、パンフレットの必要性はあまり無い。
- ・英語のできるスタッフが一名。（森恭一）基本的に随時対応。

- ・ 日本手話が必要となる場合は、観光協会の花里さんをお願いする。(森恭一さんも以前手話の講習を受講した。コミュニケーション可能な水準の手話ではないが、できる限り聾啞者の人とのコミュニケーションを積極的に獲得していこうという心構えはある、とのこと。)

OGASAWARA WHALE WATCHING

Common species.

Humpback whale, sperm dolphin, bottlenose dolphin, sperm whale.

Other species contained.

Specter dolphin, short finned pilot whale, etc.

Usually about 70 species including ones listed as common species.

Season.

Humpback whale: Feb. to June
Sperm whale: April to September
Sperm whale: mainly summer months

Travel Information.

Ogasawara Islands is an archipelago of about 30 small rocky islands. Six of the islands are inhabited. Eachima, about 1,500 kilometers south of Tokyo, and Hachijima, 50 kilometers farther south. The population is about 2,000 people. The climate is subtropical. The average temperature varies from 22°C in winter to 28°C in July.

Access to Eachima is via Tokai Exp. 4679 to Ogasawaramar. from central Tokyo. It is a 4 1/2 hr. ride. The ship and plane from Tokyo depart 4 days per week. The ship sails from A215 to Ogasawara every 4 days.

Ogasawara Kanko K.K.
Asahi Bldg., 5-2B 1F, Shinjy, Minato-ku, Tokyo, 106-0014, Japan
Ph. +81(Japan)-3-3451-5111

There are 32 isls on Chichijima and 12 on Hachijima, costing about ¥6,500 + ¥500 for a single web 2 meals. For general tourism information, contact

Ogasawara Tourist Association
Chichijima, Ogasawara-mura, Tokyo, 130-2101, Japan
Ph. +81(Japan)-4999-2-2507 Fax. +81(Japan)-4999-2-3555

図 6-2 ホエールウォッチング協会英語版パンフレット

6.5. 商工会

6.5.1. 概要

商工観光会館、別称 B-シップ

調査者：橋本・堀内

調査日：8月31日

昭和59年1月4日設立。商工会の業務は小規模企業の経営や技術の改善発達を図るための事業で、経済産業大臣の定める資格を持つ経営指導員などが金融・税務・経営・労務などの相談や指導に従事するとともに、商店街の近代化やむらおこし事業など地域の活性化のために様々な取り組みを行う。

所在地：東京都小笠原村父島字東町 商工観光会館(B-シップ) 2F

問い合わせ先：04998-2-2666

対象：小笠原の経営者の方々

6.5.2. 対応状況

- ・ 商工会が対応する人々は経営者なので、観光客が来ることは無い。故に、英語の必要

性が無い。(外国人に観光客が増えても外国語対応の必要が無い。)

- ・英語ができるスタッフ無し。
- ・日本手話ができるスタッフ無し。

6.6. 小笠原水産センター

6.6.1. 概要

調査者：下川・ゼイ・張・橋本・堀内

調査協力者：山口邦久 調査日：9月2日

小笠原諸島海域の海洋調査を継続的に行い、資料を蓄積し、種々の調査研究の資料と合わせて解析し、漁況、海況予測を行う都の研究施設。

- ・併設の水族館（飼育観察棟）が一般開放

営業時間：午前8時30分から午後4時30分まで 年中無休

対象：研究者、飼育観察棟は観光客、一般

6.6.2. 対応状況

- ・水族館の展示開設は日本語表示のみ。
- ・小笠原水産センターのパンフレット英語版有り（図 6-3 参照）。英語版パンフレットは申告すればもらうことができる。



図 6-3 小笠原水産センター英語版パンフレット

- ・ 英語のできるスタッフが二名（木村ジョンソン・野沢テディー）。二人がいるときは英語対応可能。事前にアポイントメントを取ることが望ましい。
- ・ 日本手話のできるスタッフ無し。要望があれば日本手話のできるスタッフを採用するが、今現在は手話の需要希望が無い。
- ・ 研修で外国人の利用者が訪れることがあるが、通訳つきでくるか、英語が話せる職員がいるので問題は無い。

6.7. 小笠原海洋センター

6.7.1. 概要

調査日：9月2日

1982年4月、アオウミガメをはじめとする小笠原の生物の保護に尽力するため開設された。以来、特にアオウミガメやザトウクジラなどの海洋生物の生態を研究、解明し、それぞれの結果は世界的な評価を得ている。今も昔も変わらない美しい製氷海岸を目の前に、地元では、「カメセンター」の愛称で親しまれ、情報の発信、教育・交流の場として島内外の皆様に広く利用されている。

住所：東京都小笠原村父島屏風谷

開館時間：8時から12時まで、13時から16時まで 無休

料金：大人500円、小人300円

問い合わせ先：04998-2-2830

対象：一般、研究者

6.7.2. 対応状況

- ・ パンフレットは日本語版のみ。英語版パンフレットを作りたいという希望はあるが、現在は無い。
- ・ 英語のできるスタッフが二名（山口真名美さん、油田照明さん（油田さんはアルバイトなのでいつまでセンターにいるかわからない））。
- ・ 展示解説は、一部に英語解説有り。（図6-4参照）
- ・ 基本的に展示解説は行っていないが、希望があれば解説可能。解説を希望するときは、日本人、外国人を問わずアポイントメントをとることが望ましい。
- ・ 日本手話のできるスタッフ無し。
- ・ インターネットにサイトあり、(<http://bonin-ocean.net/>) 英語対応ページを作りたいという希望はあるものの、現在は英語対応なし。

6.8. 個人で外国語対応可能な方

- ・ アリラン（韓国語料理店）の経営者 対応言語：韓国語
- ・ マーセル（有料ガイド オランダ人）対応言語：英語、オランダ語、フランス語

- ・ 伊達丈浩（小笠原高校の英語の先生）対応言語：英語、韓国語

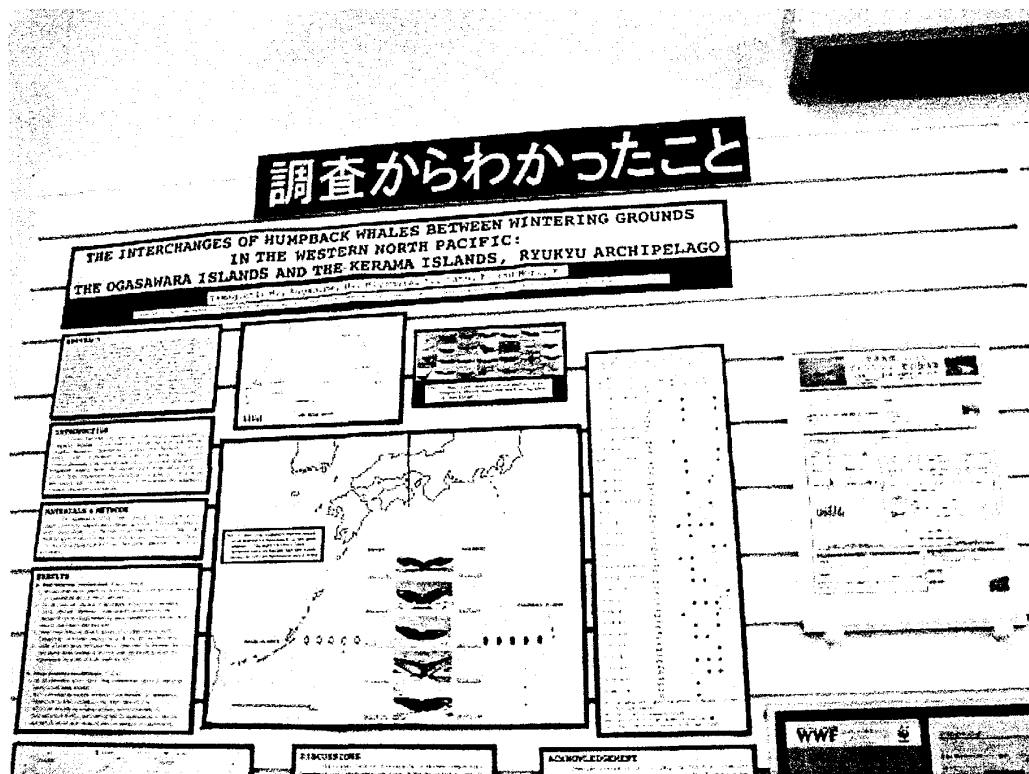


図 6-4 小笠原海洋センター英語版展示

6.9. まとめ

	英語版パンフレット	英語対応	展示英語解説	英語 HP	日本手話
ビジター・センター	○	○ (アポ必要)	○	×	×
農業センター	×	×	△	×	×
観光協会	○	×		×	○
ホエールウォッチング協会	○	○		○	○
商工会	×	×		×	×
水産センター	○	○ (アポ必要)	×	×	×
海洋センター	×	○ (アポ必要)	△	×	×

○ …対応 × …不可 △ …一部対応

7. 小笠原の多言語対応の試み：ビジターセンター案内中国語版作成の問題点と課題（ゼイ・エン）

7.1. 歴史に関する内容（担当者：ぜい・えん）

担当内容：小笠原歴史に関する展示用の日本語の説明を中国語に訳することである。

7.1.1. カタカナ語(固有名詞)

英語表記にするか、日本語ローマ字表記にするか、あるいは発音をもとに中国語化するかという統一表記の問題である。

解決方法：対応する中国語に直して英語の表記も加える。翻訳するとき、一回目は英語付きであるが、二回目から直接に対応する中国語で翻訳している。

人名。例：ペリー(佩里・Perry)、セーボレー(賽保罗・Savory)、ジョン(乔恩・John)など

地名。例：ハワイ(夏威夷・Hawaii)、サイパン(塞班島・Saipan)、グアム(关岛・Guam)、マリアナ(马利亚纳・Mariana)など

そのほか。中国語に訳したもの。例：ハイスクール⇒高中、ノット⇒海里/時

英語に訳したもの。例：サスケハンナ号⇒Susquehanna、ラッドフォード提督学校⇒Radford、フランクリン号⇒Franklin など

7.1.2. 特有名詞

a. 歴史や時代特徴がある語、あるいは解釈しないと理解しがたい語で、相当する中国語がないため、そのまま使うか、意味解釈で名前をつけるかという問題。でも、そのまま使用しないと歴史とその時代の特徴がなくなる。

解決方法：翻訳する際解説を入れることにした。

例：御朱印船⇒紅印船(指貿易商船) →(貿易を行う商船)

このように括弧のなかに簡単な説明を入れるようにする。

例：礫器(砾器、是打碎树木坚硬的果实，或骨头用的)

このように絵に沿え、使用方法を簡単に付ける。

そのほか御舟手衆、蓮の葉桐(植物)、丸ノミ型石斧、土間、棒受け漁用などの翻訳方も同上である。

b. 中国の繁体字に存在する字で、もし固有名詞でそのまま使うとしたら、簡体字に直すかという問題である。

解決方法：日本語にも中国語にもある漢字を中国語繁体字に対応する簡体字に直すことにした。例：臨(临)、礫(砾)など

7.1.3. 小笠原ことば

辞書や関連資料を引くと、相当する名称は見つかるが、小笠原ことばの特徴がなくなる

問題である。解決方法：中国語に訳し、特徴に関する簡単な解釈を入れるようにする。

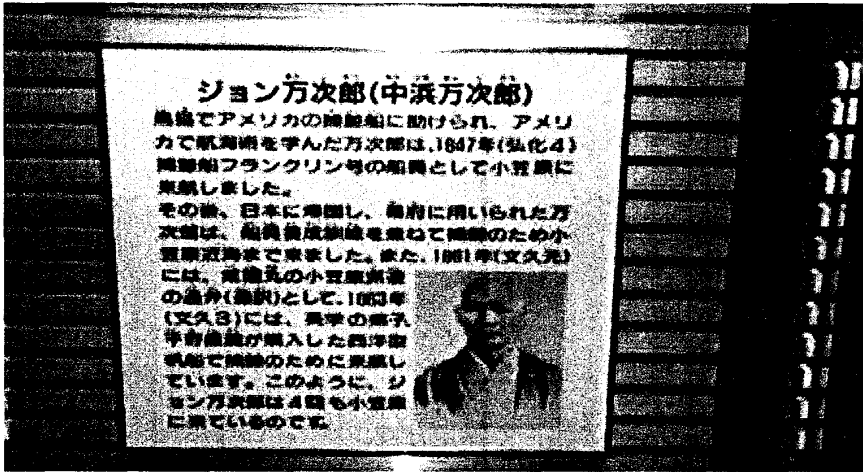
例：カヌー(独木舟、使用整块木头制作的船)→(丸木を彫って造った船)

7.1.4. 絵や地図が付いているもの

絵や地図の中に使用している日本語は英語に訳してないが、それも細かく中国語に訳すかという問題である。解決方法：地図はそのまま使用、ただ中国版があるものは対応するものを使用する。

7.1.5. 年号表記

年号表記の後に陽暦で補充表記しているものとしていないものがあるが、分かりやすく統一して全部陽暦をつけるかという問題である。解決方法：年号表記の後に陽暦で補充表記しているものとしていないものは全部統一して陽暦をつけることにする(図7-1)。



9. 乔恩(John)万次郎(申滨万次郎)

在鸟岛被美国的捕鲸船所救后,在美国学习航海术的万次郎,1847年(弘化4),作为捕鲸船Franklin号船员来航小笠原岛。之后,回到日本,被幕府雇佣的万次郎,为了进行船员训练和捕鲸鱼来到小笠原近海。之后,1861年(文久元),是作为威临丸号的小笠原派遣翻译,1863年(文久3),作为英学的弟子,并为了在平野廉藏购入的西洋型帆船上捕鲸来航。如上乔恩万次郎总计来到小笠原岛4次。

图7-1 ジョン万次郎の解説(中国語版)

7.1.6. 写真番号の統一問題

解決方法：翻訳文は写真と一対一になるように写真付けで作成する。

7.1.7. 訳語

個別単語についてはリストを作って添付することにした。また、写真に付いた一言の説

明に関しても写真なしで、翻訳だけリストに入れることにした。

7.2. 動植物に関する内容（担当者：張 衛良）

写真についている番号は撮影する時自動的に付けられた番号である。担当内容：小笠原の動植物に関する展示用の日本語の説明を中国語に訳すること。

7.2.1. 日中両国語における表現習慣の相違

a.日本語では受身がよく使われるが、中国語では能動を使うのがより自然である。

例：

- 生物類の採取や捕獲が制限され、埋め立てや海水の汚濁に関しては、厳しく基準が設けられ、規制されています。
- 生物类的采集和捕捞受到严格限制，对填海造陆和海水污染也设定了严格的标准。

b.述語と目的語との位置に関しては、日本語における、「目的語＋述語」になるが、中国語における、「述語＋目的語」になる。

例：

- 小笠原舟状海盆をはさんだ小笠原諸島。
- 拥抱着小笠原舟状海盆的小笠原诸岛。

c.日本語では長文が多い、中国語で表現する際、短文化するほうが分かりやすい

例：

- これに対して、深さ約 4000m のは、古第 3 世紀（6400～2400 万年前）の海底火山の噴水物と海成堆積岩が地殻変動によって海上にあらわれ、波の侵食作用などによって現在の姿になったと考えられています。
- 与此相比，拥抱着深度约 4000 米小笠原舟状海盆的小笠原诸岛是古第 3 纪，海底火山喷出物和海底堆积岩由于地壳变动浮出海面，再经过海浪的侵蚀形成的。

d.日本語ほど中国語は敬語があまりないが、説明文にする際、言い様を工夫した。

e.日本語はよく主語省略するが、中国語で表す際、その略された主語を補った。

例：

- メジロに似ていますが、尾が長く、目の周りに黒い三角形模様があるのが特徴です。
- 此鸟虽然与绣眼鸟相似，尾巴长眼睛周围有三角形图案是其特征。

f.場合によって、中国語にする際、原文の日本語の語順を調整することがある。

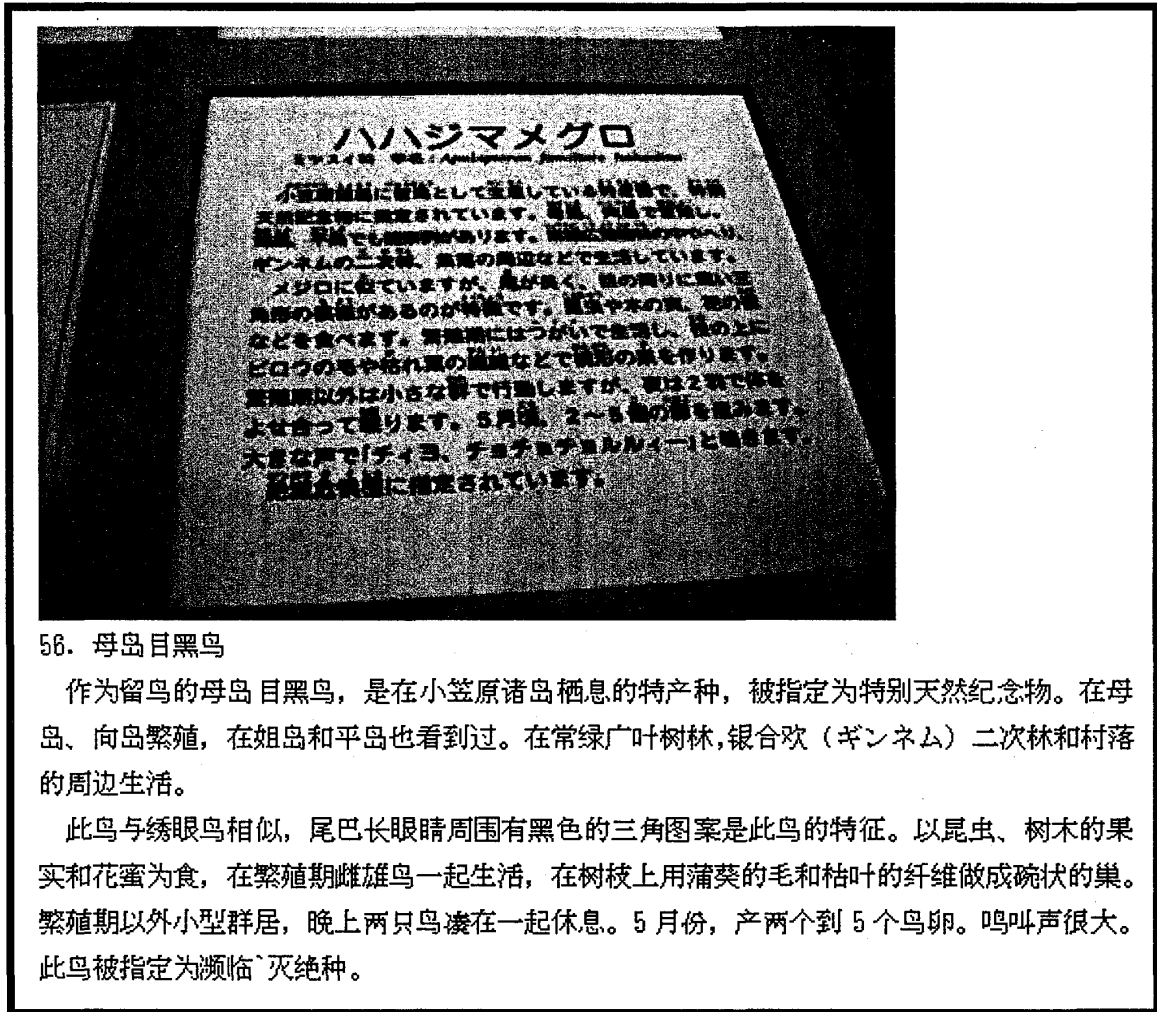
例：

- 小笠原諸島は、東京の南、1000km 以上も離れた太平洋上に点在する、大小 30 余りの島々と 217 に及ぶ付属島の総称です。
- 太平洋上的小笠原诸岛位于东京南端约 1000 公里处，由三十多个大小岛屿以及 217 个附属岛屿组成。

7.2.2. 固有名詞

動植物の名前は日中辞典で引いてみると、出てない場合がたくさんあるので、専門辞典を使って、工夫しなければならない(図7-2)。

- アカ(赤) ガシラ(頭) カラス(鴉) ハト(鳩) → 「紅頭烏鴉」
- シラ(白) ゲ(毛) テン(天) ノウメ(梅) → 「白毛天国梅」



56. 母島目黒鳥

作为留鸟的母岛目黒鳥，是在小笠原诸岛栖息的特产种，被指定为特别天然纪念物。在母岛、向岛繁殖，在姐岛和平岛也看到过。在常绿广叶树林，银合欢（ギンネム）二次林和村落周边的周边生活。

此鸟与绣眼鸟相似，尾巴长眼睛周围有黑色的三角图案是此鸟的特征。以昆虫、树木的果实和花蜜为食，在繁殖期雌雄鸟一起生活，在树枝上用蒲葵的毛和枯叶的纤维做成碗状的巢。繁殖期以外小型群居，晚上两只鸟凑在一起休息。5月份，产两个到5个鸟卵。鸣叫声很大。此鸟被指定为濒临灭绝种。

图7-2 ハハジマメグロの解説(中国語版)

7.2.3. 文字表示

a. 日中両国語で形でも意味合いでも共通している文字。

- 「寿命」→「寿命」

b. 日本語文字を簡体字化にし、そのまま使える。

- 「種類」→「种类」、

c. 中国語の中で存在しなく、日本語特有の文字。

- 「聳島列島」→「聳岛列岛」

d. 日中両国語で同じ意味で、表示し方は異なる地名。

- 「水辺」→「水边」、「回遊」→「回游」、「亜熱帯」→「亚热带」

8. 「小笠原ことば」に関する展示の報告（橋本早帆）

8.1. 小笠原ことば展

開催期間 2006年11月1日から12月19日

開催場所 小笠原ビジターセンター

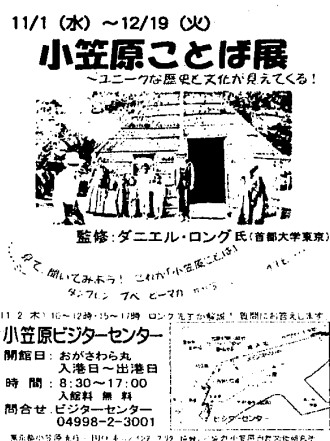


図 8-1 展示会のチラシ

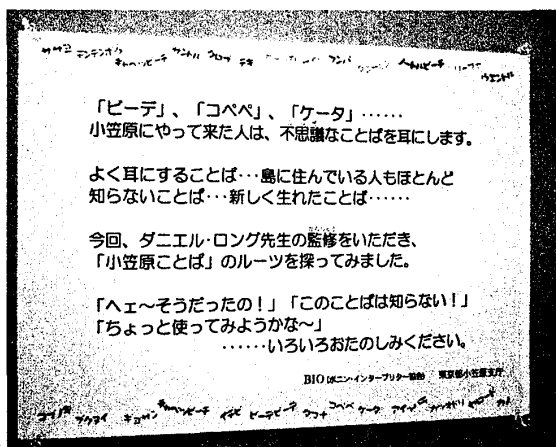


図 8-2 展示会の入り口の文

8.2. 展示の目的

「小笠原ことば」は小笠原の独特な歴史や文化に、耳や目を通して直に触れられる貴重な資源である。観光客にとっても、魅力的な観光資源となる可能性は十分にあると思われる。当展示より以前、2006年9月4日にビジターセンターで催されたダニエル・ロングの講演「小笠原ことばに見られる島の歴史と文化」では、語源に関する質問が多く、島民も観光客も、ともに小笠原ことばとその文化的、歴史的背景への関心が強いことが伺えた(図 8-1、図 8-2)。

しかし、実情ではそれらのことばを耳にしても、その意味や語源、背景となる歴史・文化まで知ることのできる場はほとんどないようである。また、使われなくなり忘れられつつあることばも多い。当展示は、「小笠原ことば」の意味やルーツを紹介し、多くの方が、小笠原の歴史や文化を理解する一助となることを目指した。

8.3. 展示の構成

大別して「小笠原ことばを生んだ小笠原の歴史」、「由来言語」、「様々な種類のことば」の3つのテーマを考え、それに沿ったパネルを展示した。

8.3.1. 第1テーマ「小笠原ことばを生んだ小笠原の歴史」

第1パネルでは初期入植者が使っていた言葉を紹介した。第2パネルでは八丈島など世界各地から入ってきた言葉の紹介と日本語教育の開始を、第3パネルで米軍統治下時代の使用言語と当時新たに登場した小笠原ことばを紹介し、第4パネルで返還後の日本語教育を紹介した(図 8-3~8-6)。

ここでは世界各地からの入植と、日本から米軍統治下へ、そして再び日本へと特殊な変遷を経てきた小笠原の歴史と、その中で様々な言葉が混ざり合い、小笠原ことばが生まれたことを伝えることを目指した。

小笠原にやってきた人々の言葉

「小笠原ことば」には小笠原固有な単語もありますが、その多くは他の地域から来たものです。このように複数の異語から入った単語が混ざって、一緒に使われることが小笠原ことばの最大の特徴と考えます。

英語やハワイ語、八丈島をはじめとする日本各地の方言などにルーツをもつ「小笠原ことば」は、まさに小笠原がたどってきた歴史を私たちに示してくれます。

小笠原諸島に最初に人が定住したのは1830年です。最初の開拓者である、30数名の欧米人と太平洋諸島民が住み着くまでは無人島でした。

初期開拓者の様子 ハワイ風のアウトリガー型カヌーを操る西洋人



島田洋一 編「写真集 小笠原 - 開拓者の足跡」 / ペック社

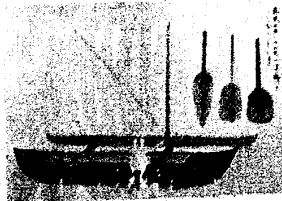
初期入植者が 使っていたことば

このように世界各地から集まって来た、それぞれ違うことばを話す人たちは、どんなことばを使って話をしていたのでしょうか？

当時小笠原に住んでいた様々な外国語の人々にとって、共通のコミュニケーション手段は英語だったようです。しかしその英語もそれぞれの言語の影響を受け、独特なピジン英語「ボニン・イングリッシュ」が出来上がったと考えられます。



小笠原にやってきた日本人は、すでに使われていた聞き慣れないことばを真にしました。



「カヌー」(カヌー)の船 小笠原開拓者協会

「ピジン英語」とは？

ペリー探検などアメリカのイギリスから来た人が到着を助けた時、クビチやハワイ出身の島民、あるいは船主などの沿岸者をガイドとして雇って、島を案内してもらっていました。当時の記録では、ペリーなどは彼らの英語は「ブローケンな英語」(交差したまじり合った)のかわりに「英語」と書かれています。このように「ピジン英語」はよくバカにされます。

しかし、当時のハワイやグアムなどの島々にとって英語は外來語でした。彼らは学校に通って英語を習ったのではなく、まわりの英語を聞きながら「自然に」覚えたので、それと彼らの発音、語の風を混ぜてきたのです。



「カヌー」(カヌー)の船の裏面 / 「カヌー」の船 小笠原開拓者協会

図 8-3 小笠原にやってきた人々の言葉

八丈島から入ってきたことば

日本人がやってきたのは、小笠原に人が住み始めて36数年後のことでした。1802年(文政5年)八丈島から幕府が募った島民30数名が、開拓者として小笠原に渡りました。1年後に幕府の判断で引き上げさせられました。13年後明治政府の下、再び日本人による入植が開始されました。



1909年(明治42年)には、2000人以上の日本人が父島で暮らしていました。彼等の多くが話していた八丈方言は、今も小笠原のことばに、ムクル(罌る)、メンザ(おせっかい)、アムラ(魚の群)、ノンバケル(むせる)などの形で残っています。

写真：小笠原諸島歴史館蔵

明治時代に日本人がやって来るまで、世界各地から様々なことばを話す人々が小笠原にやって来ました。その出身地は現在わかっているだけでも、イギリス、イタリア、デンマーク、フランス、ドイツ、ホルトガル、アゾレス諸島、ケーフヴェルデ島、バミューダ島、アメリカ、ブラジル、ハワイ、タヒチ、北マルケサス諸島、キリバス諸島、ホナヘ島、グアム島、ブーゲンビル島、中国、フィリピン、マダガスカルと世界中に渡ります。小笠原ことばは、これらの様々なことばの影響を受けてでき上がってきたのです。

写真：タヒチの伝統的な木造家屋の内部の様子

日本語教育の始まり

小笠原諸島が日本領土になった後、明治政府により学校が設立されると、英語と日本語の両方によるバイリンガル教育が、日本で始めて実施されました。

1878年父島の原浦に開校した小学校では「帰化人」と呼ばれた在米島民と八丈島を中心とする日系移住者の子どもたちが一緒に勉強していました。授業は教員がまず日本語で話し、その後、英語に翻訳するという方法で進められました。

教会での英語教室なども、太平洋戦争が深刻化し、英語の使用に対する強圧が強くなる1930年代末まで行われていました。



写真：小笠原諸島歴史館蔵
原浦の小学校(1878年)



写真：帰化人の女子小童

図 8-4 八丈島から入ってきたことばと初期の日本語教育

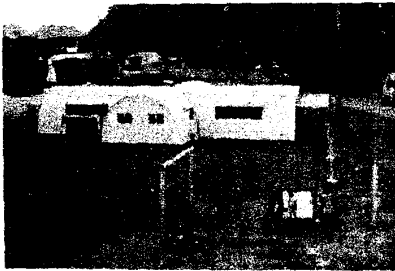
べいぐんとうちかじだい (1945-1968)

米軍統治下時代の小笠原のことば

第二次世界大戦が終結に近づく、小笠原島民全員が内地へと引き上げさせられました。1945年(昭和20年)の終戦後は小笠原は米軍の統治下に入り、翌年欧米系島民のみの備島が許可され、彼らは1968年(昭和43年)の返還までの間、米海軍の兵士やその家族と共に暮らすことになりました。

島の教育などで使用されることばは再び変わり、この時代の学校教育は英語のみで行われ、日本語は話しことばだけになりました。

米軍統治下当時の最初の校舎
(ラッドフォード提督小中学校が建てられる前の写真)



米軍統治下時代の様子 ～米軍の軍服を着る島っ子たち～



マタミルヨ (表現)

意味 「またね!」別れのあいさつ。 見る see
会う meet

語源 See you again の直訳。

日本語の「見る」と「会う」の違いと、英語の "see" と "meet" の違いがずれていることが、この表現の背景にある。



ミー (代名詞)

意味 私 複数形の「私達」は「ミーら」「ミーたち」

語源 英語の "me" に由来。

米軍時代の欧米系島民において「me ミー」という代名詞は最も典型的、代表的なことば、二人称の「ユー」も「オマエ」や「オマイ」と並んで、よく使われています。

さらに聞くと、日本語の「ワタシ、ワタクシ、ボク、アタシ、オレ」などの敬称は並存していますが、英語の「ミー」に統一すれば、そういった重複さは回避できます。

図 8-5 米軍統治下時代の小笠原のことば

にほんごきょういく

返還後の日本語教育

1945年、小笠原諸島の統治権が米国から日本へと戻ってきた。学校で使われることばも一変して日本語に変わり、小笠原に米海軍が設立したラットフォード小中学校に通っていた子どもたちは、日本への返還後には日本語の授業を受けることになったのです。



英語と多くの島の言葉が授業で教える 小笠原の 返還後の教室



返還後 小笠原高校を卒業した第一期生は2人だけでした。 写真提供 大平敦子さん

米軍時代には、島の子どもたちはみんな英語の読み書きを習っていましたが、日本語の読み書きはほとんどできませんでした。そして話しことばでは、日本語と英語を混ぜて会話をしていました。返還後の彼らは、日本語の読み書きを覚えること、また英語を混ぜないで日本語を話すことも苦労しました。

図 8-6 返還後の日本語教育

8.3.2. 第2テーマ「由来言語」

第1パネルでは英語に由来する言葉を、続く第2,3,4パネルではハワイ語に由来する言葉、ポナペ語、スペイン語、あるいは語源不明などその他の言語から来た言葉、八丈方言から来た言葉を、それぞれ意味、語源とともに紹介した(図8-7~8-12)。

第1テーマで紹介した歴史を受け、それが小笠原ことばの中にどのような姿で残っているのかを伝えることを目的にした。また、言葉という目に見えないものをより具体的にイメージしてもらう手段として、その言葉が指す物の実物展示も行った。[図8-8]⁹

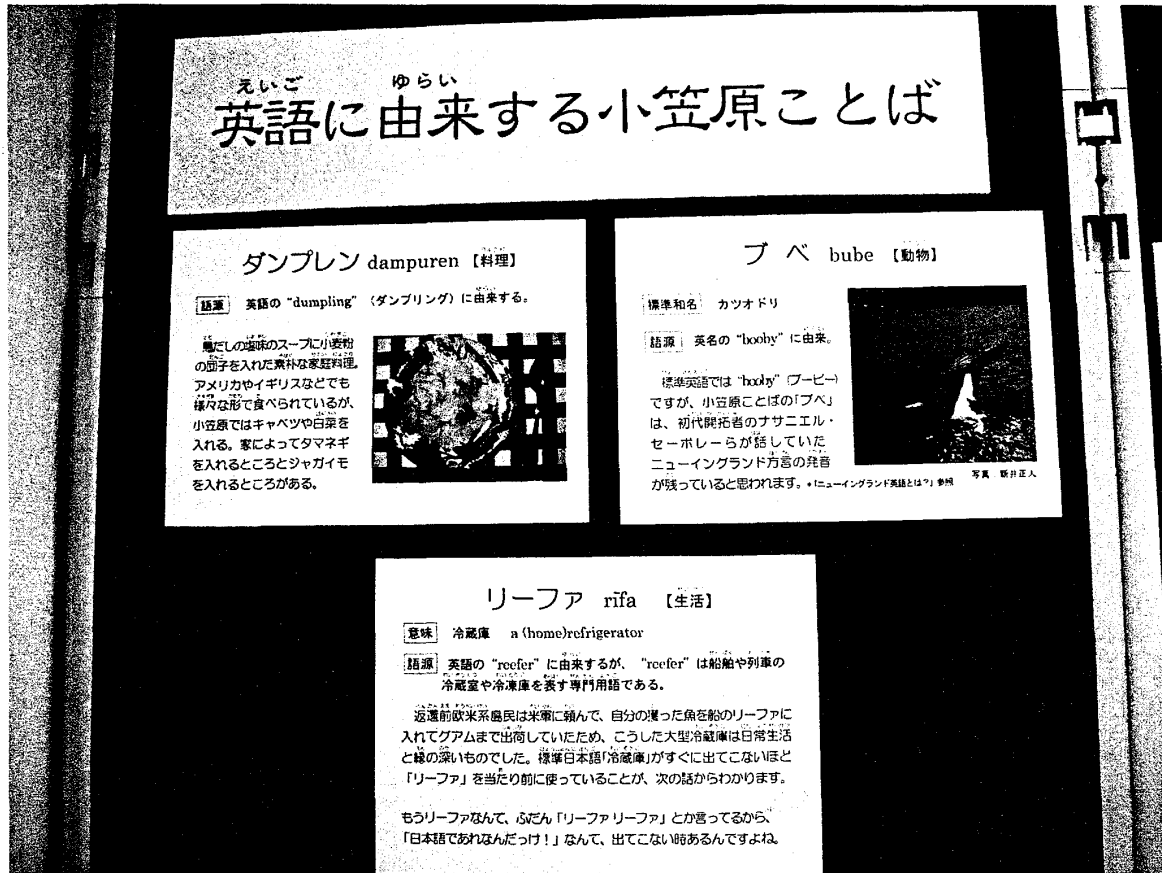


図8-7 英語に由来する小笠原ことば

⁹ 例えば「カノ」ならカヌーの模型を、「ルーワラ」ならタコの葉細工を展示した。

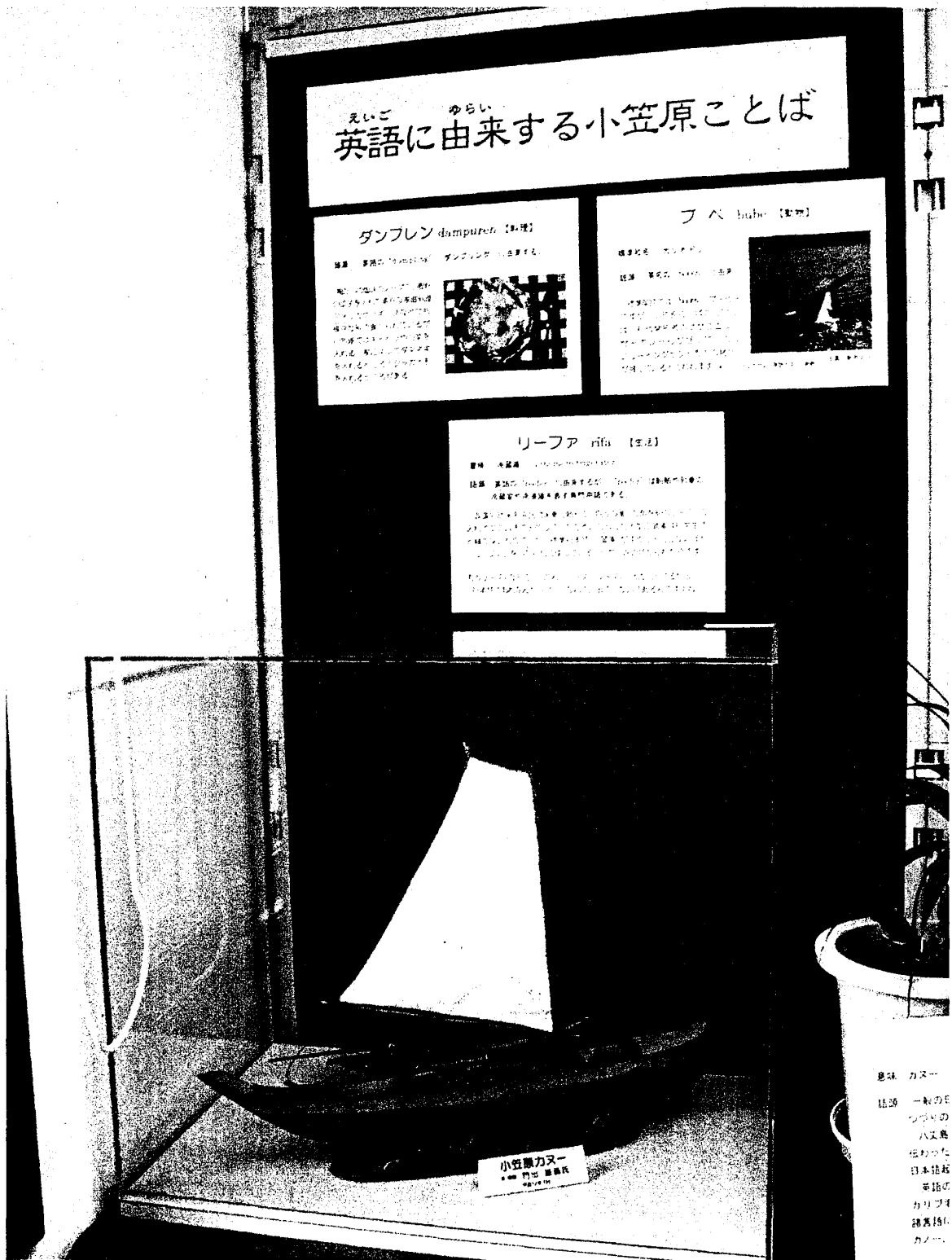


図 8-8 英語に由来する小笠原ことば

原ことば

フベ buju 【動物】

標準和名
学名
英名



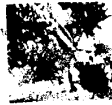
標準和名

学名
英名

ハワイ語に由来する小笠原ことば

ピーデピーデ 【植物】

標準和名
学名
英名



ヒーマカ pumaka 【動物】

標準和名
学名
英名



ホーレイ horei 【動物】

標準和名
学名
英名



標準和名
学名
英名

ルーワラ ruwara 【植物】

標準和名
学名
英名



標準和名
学名
英名

カノ kano 【生活】

標準和名
学名
英名

標準和名
学名
英名

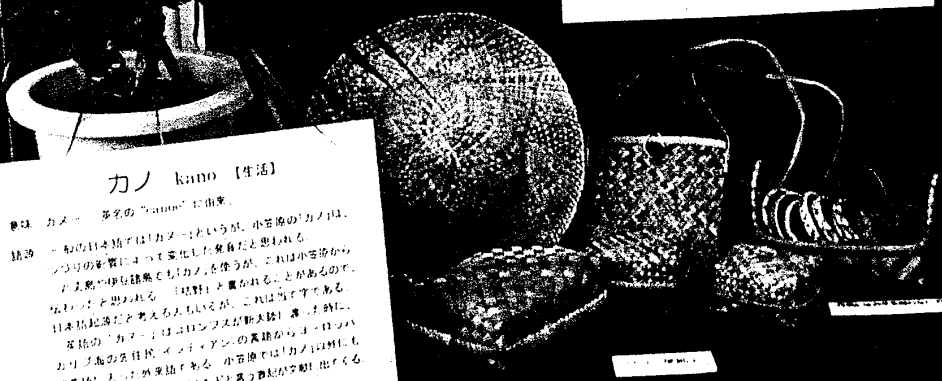


図 8-9 ハワイ語に由来する小笠原ことば

ゆらい
ハワイ語に由来する小笠原ことば

ピーテピーテ 【植物】

標準和名 デイコ 学名 *Dayco* 英名 *wahl tree*

小笠原海防の文化祭「ピーテ祭」の名前に使われている、地歌で歌われるなど小笠原の人々にとっての大切な樹木です。地歌の詞木があります。

語源 ハワイ語で同属の木である「wili wili」(ワ・リ・リ、学名 *Freycinetia sanderiana*) に由来する。

ではどうして「ピーテピーテ」という発音が「ピーテピーテ」になったのでしょうか？
 実はハワイ語では、w と p の発音は区別されず、実質「w」が「p」にも発音されます。小笠原に定住する以前には「wili wili」、「wili wili」などの発音でも見られ、このことから明治時代の小笠原ではハワイ語の w と p の発音が混同されていたことがわかります。



ピーマカ piimaka 【料理】

語源 ハワイ語で「酢」を意味することは「pinika」に由来。「pinika」もまた、英語の「vinegar」(酢)に由来する。

小笠原の代表的な料理のひとつ、マフヨ(爆弾を形ミナミズミ)を薄くスライスして、酢漬けにしたもの。19世紀初め小笠原にやってきたハワイ系入植者が伝えたと考えられる。



ホーレイ hōrei 【動物】

標準和名 ミナミズミの糞体
 学名: *Kyphosus legibius*
 英名: (yellow variety of grey chub)



語源 ハワイ語の「hōrei」黄色染料として利用されたハオに似た木に (*Ochroma campestris*) に由来するのではないかとと思われる。ホーレスという発音もあることから、別の語源説もある。(※民間語源説のペナル参照)

関連語 ホーレイポイント Hōrei Point 釣浜とワシントンビーチ島(小笠原)との間にある岬。ホーレイがよく獲れたことに由来する。

ルーワラ ruwara 【植物】

標準和名 タコノキ
 英語名 lohala (英名: Pandanus)



語源 ハワイ語の「lauhala」(タコノキの葉の意味)が起源。ハワイ語で「lau」は「葉」、「hala」は「Pandanus odoratissimus」という木の名称。

他に ラウハラ、ラワラ、ラハロー、ラワラフ、ロハラツリー、ロハラ、ロワラ、lohala palm などという書き方が文献に残っています。

小笠原の固有種で、「小笠原村の木」に指定されています。だこの足のような葉をたくさん採り、街路樹にも使われています。また、葉は土産物産で売られている「タコノ葉織工」の材料になります。



タコノキ

図 8-10 ハワイ語に由来する小笠原ことば

げんご
その他の言語から来た小笠原ことば

ポナペ語から来た小笠原ことば

フンパ fumpa 【動物】

標準和名 ムラサキオカヤドカリ

語源 ポナペ語でヤドカリを意味する“mpwa”に由来するの？

父島・母島で最も多く生息しているのは、写真のムラサキオカヤドカリです。ムラサキといっても若いものはクリーム～茶色をしています。



どちらもムラサキオカヤドカリ



夜明道路の標識

ごげん ふめい
語源不明

ハプーチャ hapucha 【動物】

標準和名 トラツグミ 学名: *Zoothera dauma*
英名: scaly thrush, White's thrush

語源 同じ鳥をあらわすビーボードリやフィーフィーは、鳴き声をあらわした擬音語だと思われるが、ハプーチャの語源は不明。

「朝早く鳴くよ、5時ごろから、
ビーポービーポー、フィーフォー。
あれがしばらく自分の家のまわり
で鳴くといやがるっていうよ。
人が死んで。」



トラツグミ

関連語 ビーボードリ、フィーフィー

スペイン語からきた小笠原ことば

ロングスタ rongusuta 【動物】

標準和名 カノコイセエビなど
大型のエビの総称。

語源 スペイン語の“longusta”
に由来。

島では英語の“lobster”からきた「ロブスタ」と、スペイン語に由来する「ロングスタ」が両方使われていました。この2つが混ざった「ログスタ」という言い方を使う人もいます。



ピャオ pyao 【自然】

意味 強い風
英名: strong winds

語源 ノスリが「ピャオ」と鳴く時、
次の日が強い風になることに
由来すると伝えられているが、
くわしい語源は不明。



オガサワラノスリ 学名: 千島千島

自然会話の使用例

「あしたはピャオだから、船出せないよ！」

図 8-11 その他の言語から来た小笠原ことば

はちじょうじまほうげん

八丈島方言から来た小笠原ことば

ムグル [潜る] 《動詞・自動詞・五段》 意味 潜る

自然会話の使用例

例) 八丈島では「ムグル」で「潜る」という動詞は、
「潜る」ではなくて「潜る」で「潜る」で「潜る」
「潜る」で「潜る」で「潜る」で「潜る」

例) 八丈島では「ムグル」で「潜る」という動詞は、
「潜る」で「潜る」で「潜る」で「潜る」

例) 八丈島では「ムグル」で「潜る」という動詞は、
「潜る」で「潜る」で「潜る」で「潜る」



八丈島で暮らすムグルをまじし人

- ▶ 派生語 プンムグル《自動詞・五段》 意味 ころんで酔がうつぶせになること。
- ▶ 派生語 ツムムグル《自動詞・五段》 意味 転ぶ、こけそうになる。
- ▶ 派生語 スムムグル《自動詞・五段》 意味 沼地で足がすぶつと入る。

ノモル 《動詞・自動詞・五段》 意味 海に沈む、波をかぶる、 to sink below the surface of the ocean to be swallowed by a wave.

自然会話の使用例

例) 八丈島では「ノモル」で「沈む」という動詞は、
「沈む」で「沈む」で「沈む」で「沈む」

例) 八丈島では「ノモル」で「沈む」という動詞は、
「沈む」で「沈む」で「沈む」で「沈む」

- ⇒ 関連語 ノメル nomeru 《他動詞・下一段》海に沈める
- ⇒ 関連語 プンノメル bunnomeru 《他動詞・下一段》早く沈める

ササヨ

意味 ミナミイヌズミという魚、島ではたくさん見られる魚で、
小笠原の料理ビーマカの材料になっている。

語源 「ササウオ」(魚)
の音に変化したもの。

英語の呼び名 "jacket"
ジャケットもよく聞か
れます。

*「ササヨ」は八丈島方言です。



ナムラ [魚群] namura (名詞)

意味 (魚、山羊などの) 群、人の集団。
school of fish, a herd or goats, a small group of people.

語源 八丈語から来たこの言い方は本来「魚の群」を指すが、現在は「自衛隊
のナムラ」のように人やヤギなどが群がっているときにも使う意味拡大を
起こしたことば。

自然会話の使用例

例) 自衛隊の船がたくさん
入ってきた日に
今日、自衛隊のナムラがいっぱいよ。
例) 人数歩いているときに向こうから
歩いてくる人の姿が見えたとき

A: who is thisナムラ?
B: this is not ourナムラ, not our gang.
A: who is yourナムラ? 日本人は、
「ナムラ」ってね。



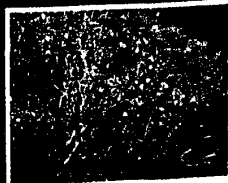
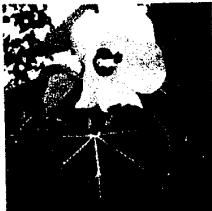
小笠原 (日守ドフィールド) 小笠原の船を多く集めるナムラ

イチビ ichibi [植物]

① 島名 ヤマイチビ
標準和名 テリハハマボウ
英名 Mountain Hoo,
Sea Hibiscus

② 島名 カイガンイチビ
標準和名 オオハマボウ
英名 Maha, Sea Hibiscus,
Cotton Tree

語源 八丈方言に由来。他に、
英語島名の "Mountain Hoo"
に由来するマウンテンハー、
その短縮形のマーハー、マーハーとハマボウの混交形のマーボー、
英語の "ivindam" + 日本語の「木」でモンテンボクなどの呼び方がある。



ヤマイチビ

図 8-12 八丈島方言から来た小笠原ことば

動物の名前

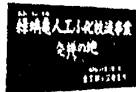
ウェントル 【動物】

標準和名 見知らぬ小さいアイウミカメ 学名 *Chelonia mydas*
 英名 *hawksbill sea turtle*

語源 英語の "wandering" ウォンタートートルがなまったもの
 アイウミガメの呼び方としては他に
 ショーカウボウ、トウモロコシ、ロッケーキ
 目撃者 などもある



小笠原ことばはほとんど話しことばだけ
 ですが、「ウェントル」はこのように書き
 ことばとしても使われることがあります
小笠原ことばの解説



『アイウミガメ人工小笠原島の地』
 稲巻誠 著 緑島人工小笠原島センター

ウーフー 【動物】

標準和名 フダイー般を指す 学名 *Siganus* 英名 *parrotfish*

語源 ハワイ語でフクタイー般を指す "ulu" に由来する



ナンヨウフクタイー

フクタイー

ネーネー 【動物】

標準和名 雌ヤギ

語源 英語の "nanny goat" に由来する。
 ネーネーゴート、ネーニゴートともいう。
 ちなみに雄ヤギは英語の "billy goat"
 に由来し、ビレ、ビレゴート、
 ビリゴートとよぶ。



ネーネー



ネーネー、ネーニゴート



ビレ、ビレゴート

「ニューイングランド英語」とは？

標準英語では「フニー」と発音するのに、どうして小笠原では
 「ネーネー」と発音するのでしょうか？ 元はオランダ語が
 近代アメリカ・セーボレー語に伝わり、アメリカのニューイングランド
 地方(ボストンなどがある地域)から来た人たちがいたためです
 古いニューイングランド地方の名残りである。では、「フニー」
 よりも「ネーネー」に近く聞こえたのでしょう。

「ダンフリング・ダンブレン」、「ビリーゴート・ビレゴート」、
 「セーボリー・セーボレー」にもこうした影響が見られます。

図 8-14 動物の名前

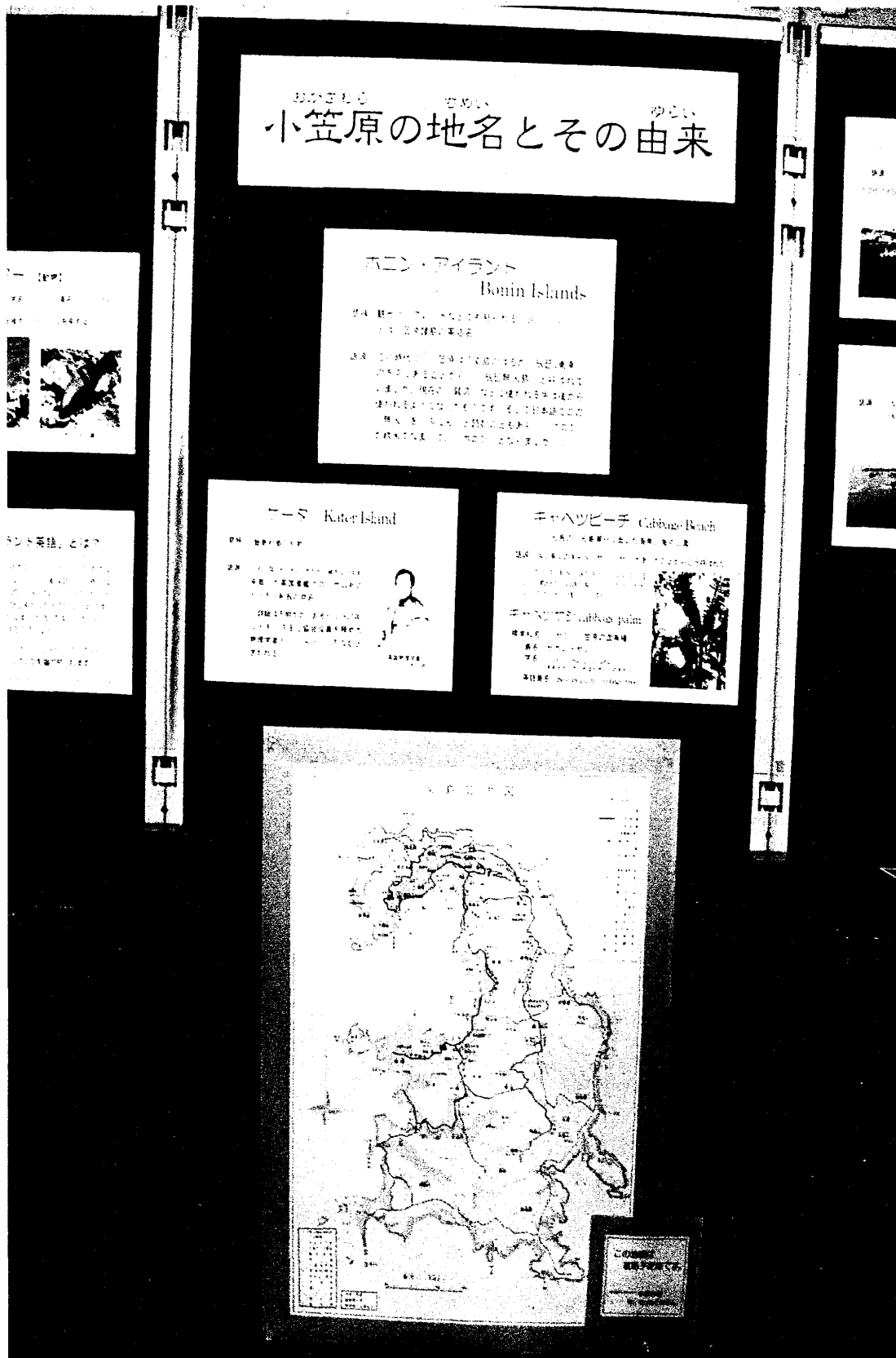


図 8-15 小笠原の地名とその由来

コヘヘ海岸

語源 「コヘヘ」という名前の太平洋諸島系島民にちなむ。



コヘヘ家は1906年
母島別荘から父島横浦に
移り、移りながらスー
だった島がコヘヘ海岸
と呼ばれるようになった。

中山間からコヘヘ海岸を望む
右手は小島横浦に続く

ブクヌイ(小港)

語源 ハワイ語の "puka" (穴) "nui" (大きい) に由来する。
コヘヘ海岸と小港の間にある
海食洞を指すと思われる。



ブクヌイ小港

小港は「ノートルビーチ」と
いう別の名前もある。これは
要約の「島の海」を意味
する "No Turtle Beach"
がなまったものである。

円縁湾(まるべりわん)

語源 "Mulberry Bay" に由来する当て字。
"Mulberry" は英語で「桑」の意味。



円縁湾 ハートロック(海軍省)の下の広い

ランパ ranpa

意味 長崎のこと。父島の北東部にある岬。

語源 ラングハイントウ "long point" が詰まった言い方。
「ロングポイント」に
なっていないのは、
初期入植者が話していた
ニューイングランド方言
の影響だと思われる。



長崎側面からランパを望む

関連語 ロンパやロンパンと
言う人もいる。

民間語源説

単語の語源がはっきりしないとき、人々が想像を主として想像・創造した説明を
「民間語源説」と言います。小笠原には民間語源説がたくさんあります。

	本当の起源と思われる	民間語源説と思われる
Bonin (Island)	日本語の「無人島(にん)	(スコットランド語の "bonny" 「きれい」) 2. スペイン語の "bonita" 「きれい」 3. 英語の "bonny" 「着ばった」 (着だるけの縮約から)
ドンガラ (釣がれ)	ドンと行も、ガカガラ響き 上げる (ドンガラズルの (本丸参照))	英語の "don't get it" (とれなかった)
ホーレイ、ホーレス (黄色いマニイズミ)	ハワイ語の hōlei (黄色染料 として利用された木)	ホレス・セーボレー(2代目)が好んで 食べたことから
ピースアイランド (無難島)	喧嘩していた島民たちが和平 (peace) を結んだ場所だったから	島高の歴史にたびたび登場する Benjamin Pease 船長

タマアの木の「玉名」、マルベリー湾の「円縁湾」のような当て字は、民間語源説によって
使われるようになるのもある。逆に民間語源説を主に出す場合もある。これを「能楽い」と
決め付けると、一般人がことばに対して持っている確信の強さの、パロメーターと
して使えた方がよさそうです。

図 8-16 地名と民間語源説

どうし けいようし 動詞・形容詞など

Maybe シタラ(メイビーシタラ)《副詞》

意味: もしかしたら もしかすると Maybe

自然会話の使用例: 「メイビーしたら、東船名簿に書き忘れたのはミーの名前じゃない？」

英語と日本語がこのように融合している表現は、英語学者たちにとって、たいへん興味深い現象です。

エズイ《形容詞》

意味: 心地が悪い、違和感がある。落ち着きが悪い、道具などが使いにくい。特に服など着心地が悪い時によく使われる。

ドンガラスル dongara suru?

《動詞:自動詞・サ変?》

意味: 的を外す。 "to miss one's target"

語源: 日本の捕鯊船用語に由来する。鯊を狙って捕鯊砲を撃つと「ドン」という大きな音がして鯊が宛射される。はずれた場合には「ドン」の後に、鯊を回収するため網を巻き上げる「ガラガラ」という音が続く。「ドンガラスル」はこの擬声語「ドン+ガラ」からきた言い方。

小笠原ことばでは、意味が広がり、ヤギを乗らなくなった時や、ゲートボールでゴールをはずした場合にも使われている。

自然会話の使用例: 「アイヤイヤイ! ドンガラした!」

小笠原ことばの特徴ある単語には物の名前(名詞)が多いですが、それだけではありません。独特な動詞や形容詞も見られ、さらには副詞、感嘆詞にも興味深いものがあります。

「小笠原ことば」の特徴は単語だけではなく、接頭辞や接尾辞のような「言語のパーツ」(言語学者が言う「形態素」)もあります。

～サツ -sa 《接尾辞》

意味: 感動を表す形容詞の接尾辞。「怖サツ」「憎サツ」のようなかたちで用いられる感嘆詞的用法。八丈や九州方言に見られる。

自然会話の使用例

〈例〉「津波のときに、コックジョまで水が入って、沸きっていたじゃ! コワッサツ!」(コックジョ=台所)

〈例〉「あの顔、ニクサツ。」(ニクイ=ぶさいくな)

小笠原ことばの接頭辞

東京語にも「ぶっ飛ばす」や「ひっかける」のように、接頭辞がついた動詞がいくつかあります。小笠原ことばがこれと違うのは、接頭辞の種類が多いこと(接頭辞は決まった表現以外にも自由に作れること(言語学者は「生産性が高い」という)にあります。小笠原では例えば、「ブッ」がついている「ブッ切る」や「ブッたらがる(タラガル=横になる)」が聞かれます。『小笠原ことば・しゃべる辞典』に載っている接頭辞つき動詞には、

オッ(オッベシヨル、オッベス)、カッ(カッチャク)、カン(カングリカエル、カンマウス、ジツ(ジツバク、ジツバム、ジツメル、ジツチャクム、ジツチャブク、ヒツ(ヒツカスル、ヒツカブル、ヒツチメル、ヒツチャク、ヒツチャクル)、ヒン(ヒンネシム、ヒンマガル、ヒンメクル)、フツ(フツカガム、フツキム、フツチル、フツトス、フツメル、フツコム、フツコロブ、フツラガム、フツチカス、フツチャル、フツツク、フツトース、フツバタク、フツバム、フツベシヨル、フン(フンガム、フンガム、フンメル、フンマウス、フングル)

があります。しかし、これは冰山の一角かもしれません! 島に住んでいる皆さん、『小笠原ことば・しゃべる辞典』に載っていることばを見つけてください!

図 8-17 動詞・形容詞など

新しく登場したことば

意味が変化したことば

八丈島方言が小笠原に渡り、そのまま使われ続ける場合もありますが、小笠原に入った後、意味や発音、あるいは動詞や形容詞の活用方法などの文法的特徴が変わった単語もたくさんあります。

「小笠原ことば」には、むかし島に伝わってきた古いワイ語や八丈方言、ニューイングランド方言の英語がもちろん入っています。

しかし他の言語と同様「生き物」のように、常に生まれ変わり、新しく登場することばもたくさんあります。

マグレル 《動詞：自動詞・下一段》

小笠原ことばの意味 大笑いをして、笑い転げること。

小笠原ことばの自然会話の使用例 「笑って、笑って、マグレル！」

八丈方言の意味 猛烈な痛みを感じること。

「痛みて苦しむ」というつらい事と、「笑う」という楽しいことは、一見正反対のようです。しかし、考えて見れば「転倒する」や「氣絶する」という共通の意味由来を最初から持っていました。そこから、「(倒れるほど) 痛い」や「(倒れるほど) 大笑いする」というように変化したと考えられています。

前浜 (マエハマ) maehama

大村海岸の通称。米軍時代には使われなかったで、返還後にできた比較的新しい小笠原ことばであり、筑摩樹大村の前浜なので、「前浜」と呼ばれ始めたと思われる。

マエハマなんて音がつかないが、あれは返還になってから付けた名前じゃない？ マエハマなんて、私らも知らなかった。マエハマってどこか？



前浜 (大村海岸)



台風が来るとサーファーでにぎわう

タラガル 《動詞：自動詞・五段》

小笠原ことばの意味 横になる。特に、横になってだらんとすること。

小笠原ことばの自然会話の使用例 「大の字になってタラガル。」
「なんか今ちょっとつらくて、タラガった。」

八丈方言の意味 「座る」 特に「案に座る」ことや、「地べたなどにだらしく座る」こと。

19世紀に小笠原に伝わったのは、八丈方言の意味だったでしょうが、意味が徐々に変化したと思われる。「だらしく座る」から、姿勢がさらに一歩崩れた「横になってだらんとする」に変化しています。

ギョサン gyosan

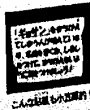
意味 もともと漁師など漁具関係者が履いていた、柔らかい合成樹脂一体成型のサンダル。

語源 「漁師」+「サンダル」の混成語。「ビーチサンダル」⇔「ビーチサン」

関連語 「ゴローソーリー」「ゴロヘイサンダル」いわゆるゴムソリーで、米軍時代から Bonin Islands Company (現在の小笠原生協) で売っていたため、経営者の名前からこう呼ばれたと思われる。



カラフルなギョサンは、小笠原の漁師に由来する。



この足履も小笠原的！

図 8-18 新しく登場した小笠原ことば

8.4. 会場の様子

8.4.1. ボード

会場内に設置したボードは、片面に小笠原に来た言葉の出身地を示す世界地図を貼り（図 8-19）、片面に来館者が知っている小笠原ことばにシールを貼るコーナーと質問コーナーを設け（図 8-20）、来館者が参加できる展示を目指した。

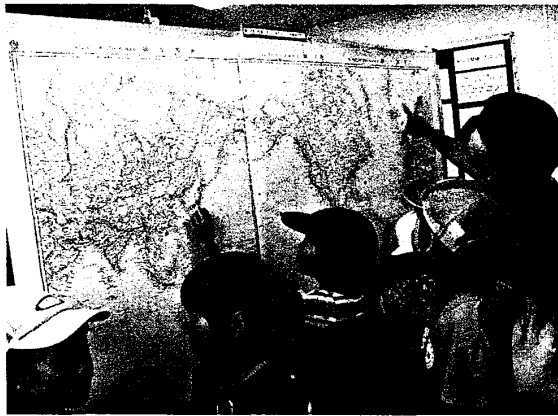


図 8-19 世界地図

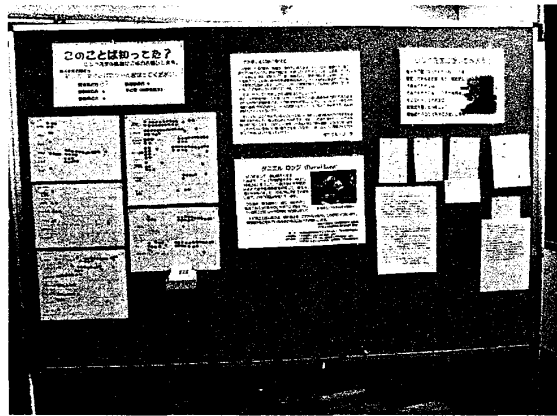


図 8-20 質問コーナー

8.4.2. 調べ物コーナーと視聴覚機器

会場に設置したテーブルには小笠原関連の書籍を置き、来館者が自由に調べ物をできるようにした（図 8-21）。同テーブルに設置したパソコンでは、『小笠原ことば、しゃべる辞典』の CD ロムを自由に操作し、好きな言葉の音声を視聴できるようにした（図 8-22）。他に『日本のもう一つの先住民の危機言語—小笠原諸島における欧米系島民の消滅の危機に瀕した英語とその文化—』の CD も来館者が自由に視聴できるよう設置した（図 8-23）。また会場内の BGM として、小笠原ことばを扱ったラジオ番組『小笠原島物語』（ニッポン放送）をラジカセで流した（図 8-24）。



図 8-21 小笠原関連の書籍が読めるテーブル

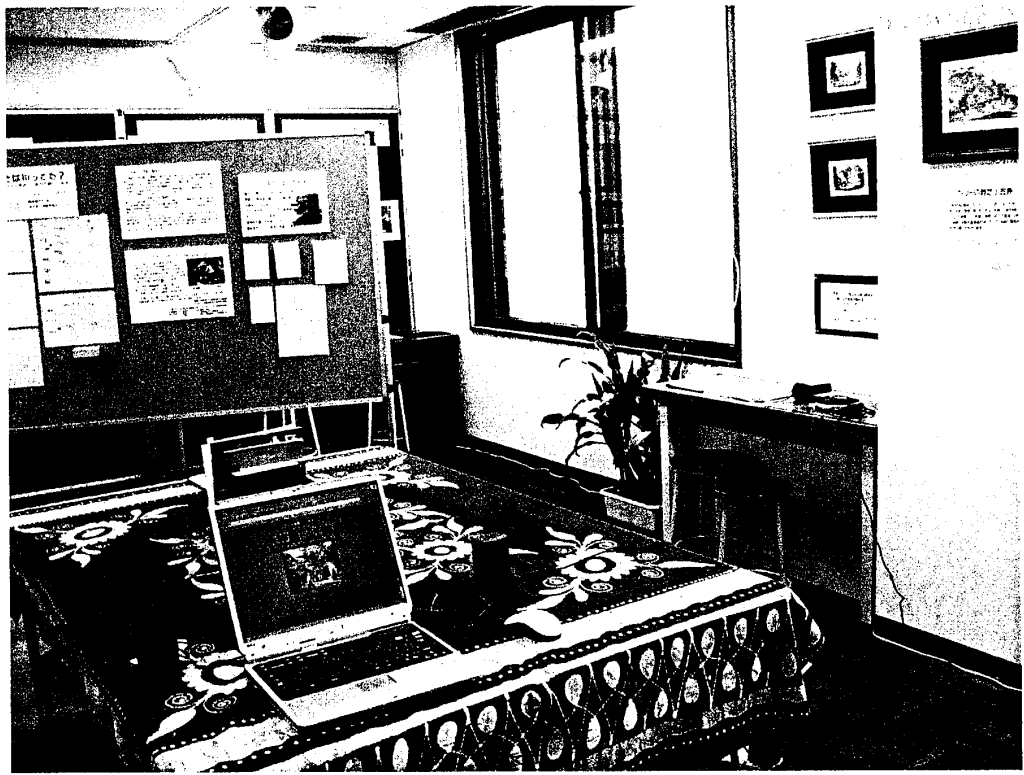


図 8-22 『小笠原ことばしゃべる辞典』が自由に操作できるパソコン

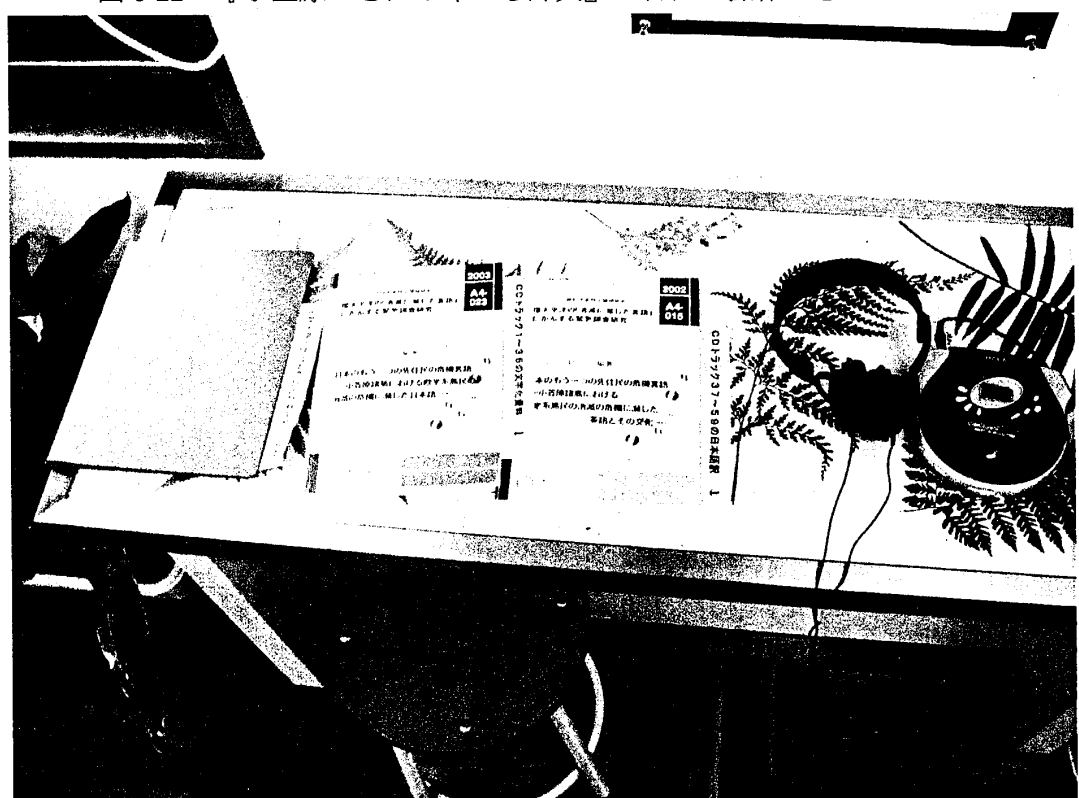


図 8-23 小笠原島民の昔の思い出話が聞けるインタビューCD



図 8-24 小笠原ことばに関するラジオドキュメンタリーを流したCD

8.4.3. ダニエル・ロングによる解説

2006年12月2日、ダニエル・ロングによる展示の解説と、来館者の質問への回答を行った(図8-25、図8-26)。

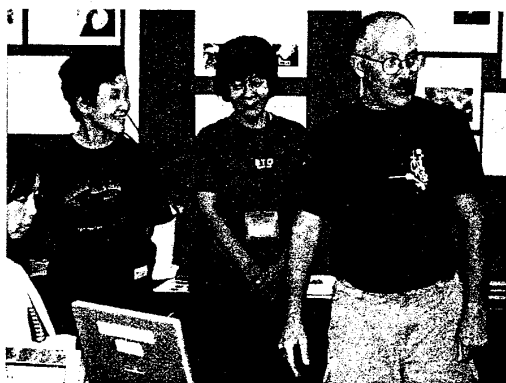


図 8-25 来客と話す大好とロング



図 8-26 来館した大平京子とロング

9. 観光資源としての「小笠原ことば」

9.1. 目で見て分かる「小笠原ことば」の看板

小笠原諸島父島の中には、様々な看板が存在する。植物の名前であったり、動物の名前、地名に関しての名前、食べ物の名前など多岐に渡る。そして、今回これらの多数の看板を観光客の立場から、目で見て分かる「小笠原ことば」の看板・目で見て分からない（分かりづらい）看板といった2つの視点で分類してみた。目で見て分かる「小笠原ことば」の看板とは、看板に書かれた物が示す意味や内容が、その看板内で説明されており、観光客が見てそれがどんな物か理解出来るものである。目で見て分からない（分かりづらい）看板とは、内容が島独自のことばや、島の文化に深く関係することばであるため、観光客がそれを見ても、説明が無ければ分からないものである。

まずは、目で見て分かる「小笠原ことば」の看板に関してはタコノキである。図9-1は道路に描かれていたタコの木であり、図9-2はタコの葉細工を作っているお店で見かけた写真であり、三つ目は実際のタコノキの木の写真である。タコノキは、小笠原諸島の固有種であり、常緑高木・花期/初夏である。小笠原の景観を代表する木で、幹から出た気根があたかもタコが足を広げているように見える。葉はプレスレットや小物入れなど「タコの葉細工」として利用している。

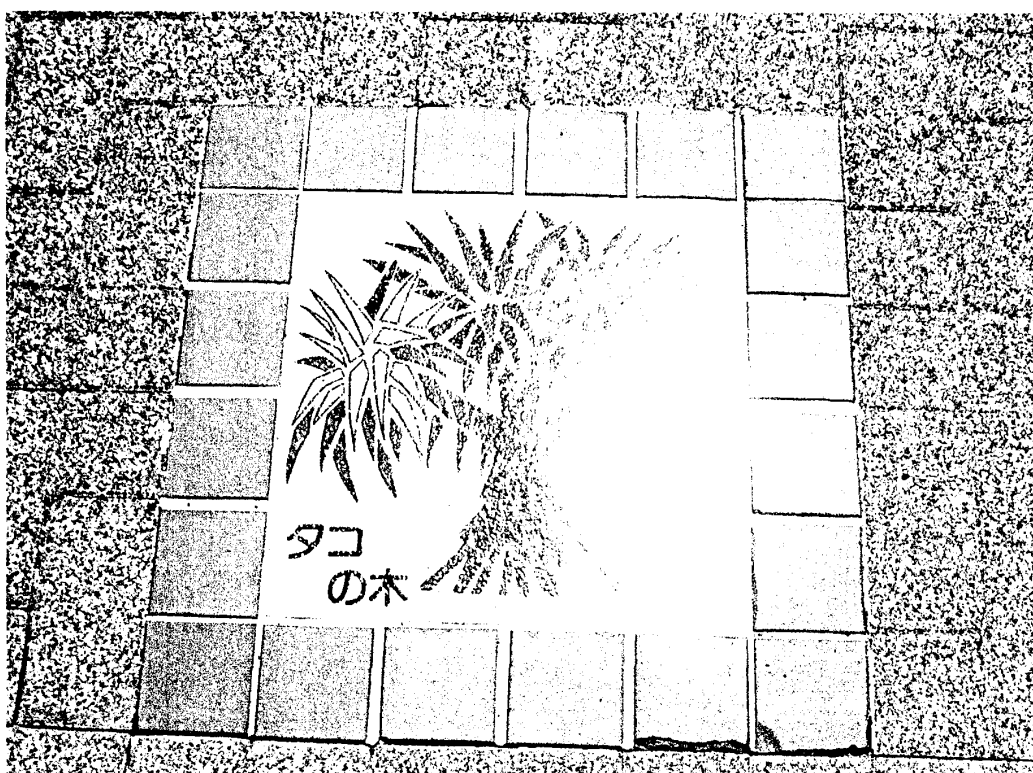


図9-1 街の歩道で見られるタコノキのタイル



図 9-2 タコの葉細工の解説



図 9-3 実がなっているタコの木

図 9-4 と図 9-5 はグリーンペペである。左の写真は小笠原観光協会が作成しているものであり、右の写真は実際のグリーンペペの写真である。左の写真は、観光客向けにグリーンペペを紹介しており、一目でどんな植物であるか理解することが出来る。標準和名はヤコウタケ、学名は *Mycena chlorophos*。枯れたタケやガジュマル、アカギの幹、樹木の落枝などに生える発光性のきのこである。



図 9-4 グリーンペペの解説

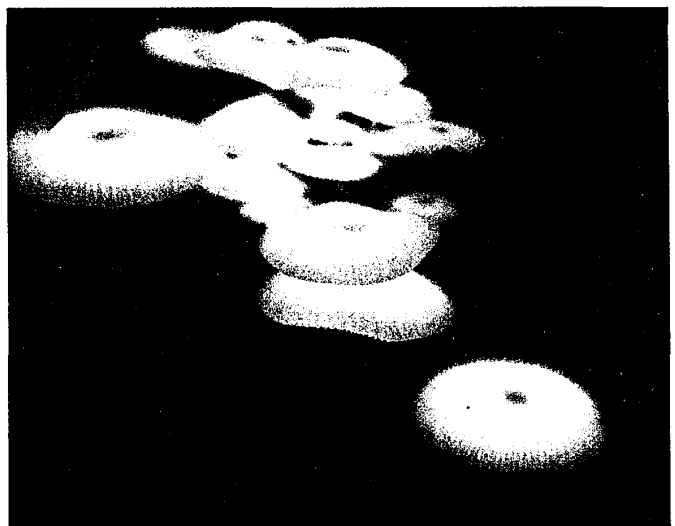


図 9-5 光っているグリーンペペ

図9-6と図9-7はムニンヒメツバキである。図9-6は、木にどんな種類であるか学名と島名で表記しており、図9-7は道路に描かれたムニンヒメツバキであり、一目でどんな植物であるか理解することが出来る。ムニンヒメツバキは、小笠原諸島の固有種であり、常緑高木・花期/5～6月である。島を代表する花木で、村では「ロースード」と呼んでいる。ツバキに似た白い花が咲き、蜜もたくさん取れる。



図9-6 島名入りのムニンヒメツバキの札



図9-7 ムニンヒメツバキの花



図9-8 歩道にあるムニンヒメツバキのタイル

図9-9と図9-10は、ムニンフトモモである。ムニンフトモモは、標準和名であり、島の人は「学名」でも一般的に知っている。また、日常会話でも使用している。観光客の人でも、写真のように観光パンフレットや道路の表示に名前と絵が載っているのだから分かりやすい。



図9-9 ムニンフトモモ

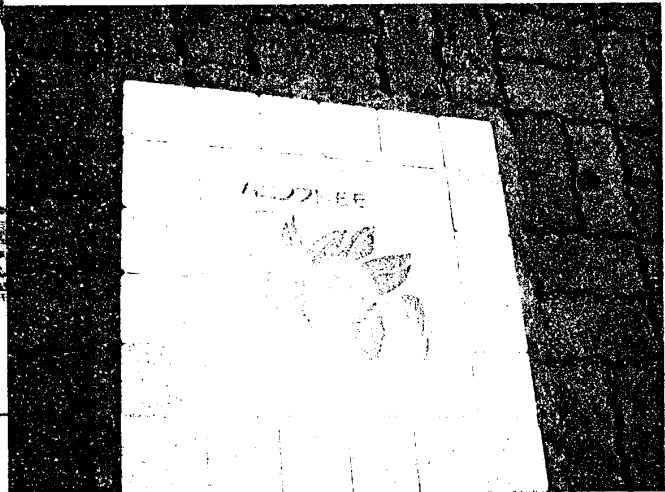
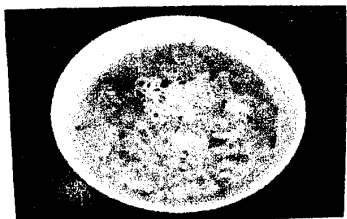


図9-10 歩道にあるムニンフトモモのタイル

図9-11～図9-12は、アカバである。標準和名はアカハタであり、学名は *Epinephelus fasciatus* である。英名は Blacktip grouper, Black-tipped Rockcod である。この写真は、レストランのメニューで見かけたものであり、アカバがどんな魚か説明されており、観光客に分かりやすい。右の写真も、道路にアカバの絵と名前が描かれているので、一目でどんな魚か理解する事が出来る。

～小笠原オリジナル～ & こだわ



あかばラーメン ¥990
島を代表する魚「アカバ」でだしをとり、
アカバの切り身をのせた贅沢な味わい。



図9-11 アカバ

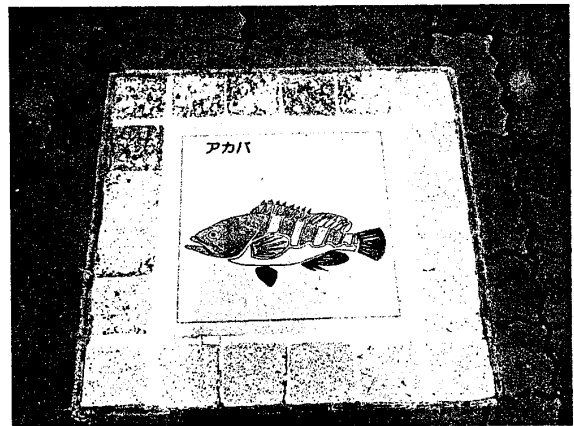


図9-12 歩道にあるアカバのタイル

9.2. 目でみて分からない (分かりづらい) 「小笠原ことば」の看板

次に、目でみて分かる「小笠原ことば」の看板とは逆に、観光客が目でみて分からない (分かりづらい) 「小笠原ことば」の看板についてみていく。目で見て分からない (分かりづらい) 看板とは、その看板の内容が島独自の言葉であったり、島の文化に深く関係のあることばであり、観光客がそれを見ても、説明が無ければ分からないものである。

図 9-13 と図 9-14 は、Yankee Town と書いてある飲食店で使用されているコップと看板である。Yankee Town は、地名の意味で奥村を指している。Yankee はアメリカ人、特にニューイングランド地方の人を指す。



図 9-13 奥村にある飲食店 Yankee Town



図 9-14 Yankee Town の特性マグ



図 9-15 チギ

チギ (図 9-15) の標準和名はバラハタであり、学名は *Variola louti*、英名は Coronation Cod,

Yellow-edged lyretail である。図 9-16 と図 9-17 は、飲食店の外に置かれていたチギを使った料理の名前が書いてある看板である。

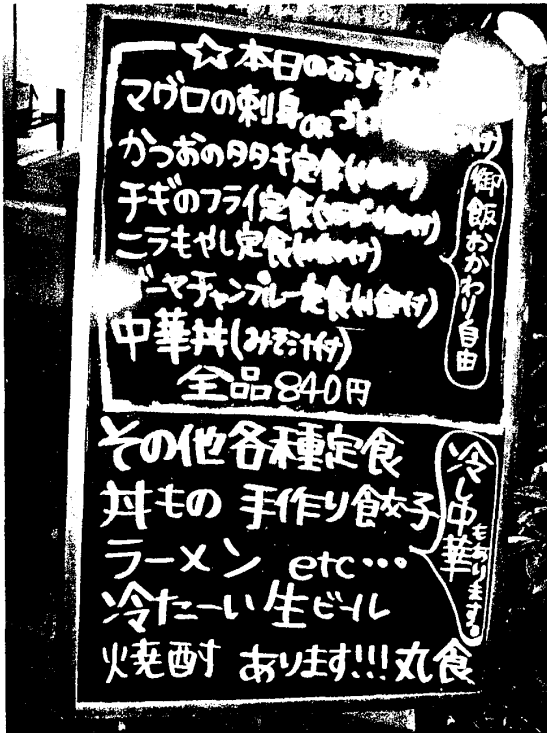


図 9-16 飲食店メニューの「チギ」

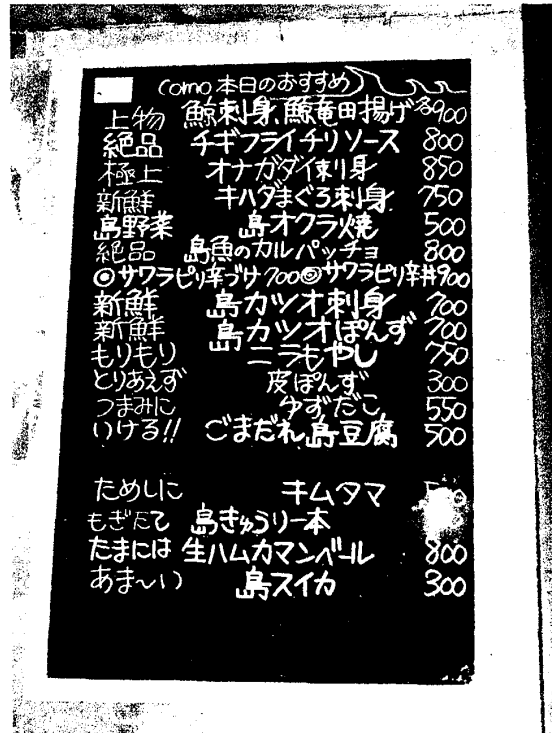


図 9-17 飲食店メニューの「チギ」

図 9-18 と図 9-19 は、飲食店のボードに書かれている料理のメニューに書かれているピーマカと言う料理である。ピーマカは、小笠原の代表的な料理の一つであり、ササヨ（ミナミイスズミ）を薄くスライスして、酢漬けにすることによって、その独特な臭みを消し、その後、玉ねぎやピーマン、大根を細切りにして一緒に漬けるのが一般的である。そして、ダイダイやレモンを絞って香りをつける。このピーマカは 19 世紀初頭に小笠原へやってきたハワイ系入植者が持ってきたと考えられている。ハワイ語で「pinika」は「酢」を意味する言葉で、これもまた英語のヴィネガー（vinegar=酢）に由来している。

島のお惣菜

のピーマカ ¥250
 のピーマカ ¥250
 のヤのキムチ ¥210
 キンピウ ¥210
 一夜漬 ¥210
 うずり一夜漬 ¥210
 のヤのカレマヨネーズ合え ¥210

☆生ビール ¥300
 ☆自家製
 橙ジュース ¥300
 ☆手作り
 パッションジュース

図 9-18 ピーマカが載っているメニュー



図 9-19 民宿で出るピーマカ

図 9-20、タマナ荘という賃貸の家が立ち並ぶ地区に置かれていたアルミ製の梯子であり、タマナ荘所有である事を示している。タマナの標準和名はテリハボクであり（図 9-21）、学名は *Calophyllum inophyllum*、英名は Alexandrian laurel, tamanu, beauty leaf, masat wood である。日本語起源ではないが、当て字として「玉名」が使われたこともある。ハワイ語で同じ木

を指す tamani (kamani)に由来する。

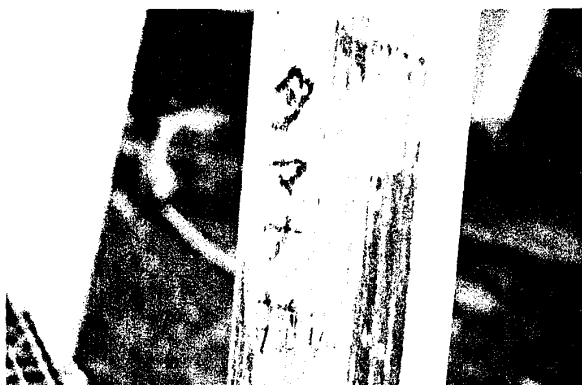


図 9-20 長期滞在者向けのタマナ荘

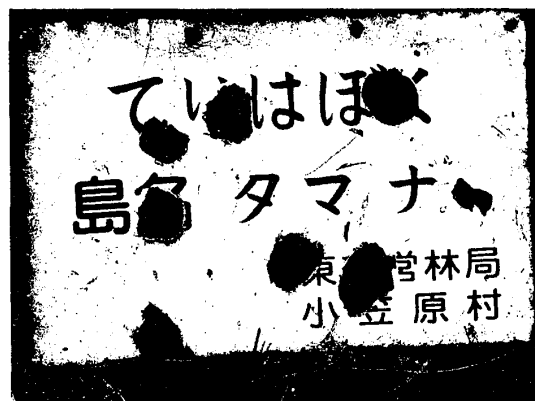


図 9-21 山道にあるタマナの木の標識

図 9-22 は、飲食店の店先に掲げてある看板に入出航日と書いてある。通常、「月の暦」で時間が刻まれるが、小笠原では「船の暦」が使用されている。船のスケジュール上、小笠原の「曜日」は入港日、入港翌日、出港前日、出港日、出港翌日、入港前日、そして再び入港日となる。

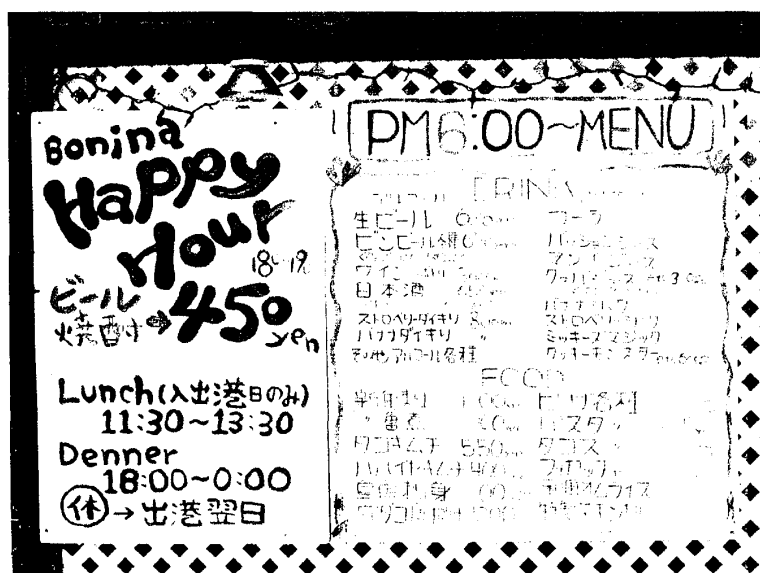


図 9-22 入出航日によって営業時間が決まる飲食店

図 9-23 は、小笠原観光の一つのドルフィンウォッチングであるが、この表記を観光客が見ると少し違和感を覚えるであろう。なぜかは、このドルフィンウォッチングを運営しているのは、欧米系の人であり、“dolphin watching”を通常「ドルフィンウォッチング (ウォッチング)」と表記するのを、アメリカ英語の発音に近い「ウワッチング」で表記をしているためであり、彼らの話す英語の発音をそのまま日本語に表記したためと思われる。



図 9-23 「ドルフィンウワッチング」の表示

図 9-24 は、Lei & koko と書いてある看板である。ハワイ語の lei は、花で出来た首飾りの意味。Koko は、物を持ち運ぶためのネット（風呂敷のようなもの）。なぜハワイ語で表記された文字が小笠原で使用されているのかは、観光資源として売り出す文化が無いため、意図的に南国の島の特徴をアピールするためだと思われる。'ohana のお祭りで見かけた出店である。

図 9-25 は Raraka Hale と書いてある看板である。ハワイ語で Hale は、家の意味である。ハワイ語を使用しているのは、島の人たちがフラを学んでおり、また、フラの理解を深めるためにハワイ語の勉強もしている。勉強をしてはハワイ語を使用して、店の名前になっている。父島の街中にあるお店の看板である。観光客はこの看板が何語で書かれ、何の意味を指しているのかは理解することは出来ない。



図 9-24 Lei & koko の販売

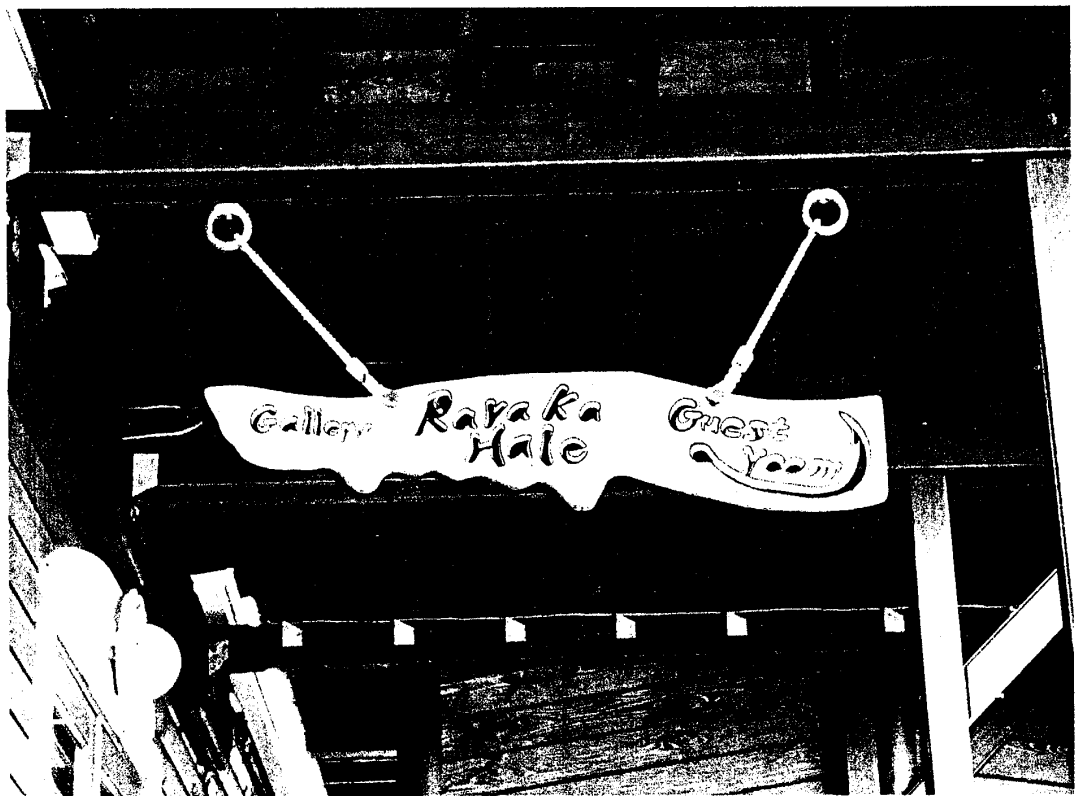


図 9-25 Raraka Hale という店

10. 小笠原の「多言語対応」の実態、問題点、提案 (ダニエル・ロング)

本書で小笠原諸島の多言語対応の実態を複数の側面から検討した。学校における語学教育において、村が非常に熱心であることが分かった。小笠原の多言語的歴史をかなり意識しているようである。言ってみれば、かつての小笠原で2回に渡って実現したバイリンガル教育をよみがえらせようという考え方である。その1回目は明治時代に日本の領土と認められ、島の公立学校で帰化人を補助教員として雇い、帰化人の子供たちに対して、英語と日本語の両方の教育が行われていた数年間であった。2回目は返還前の数年間で、ラッドフォードスクールでハワイ出身の日系人ジョージヨコタ先生の英語教育と、内地の大学を出た島生まれのアイザック・ゴンザレス先生による日本語の指導であった。もし、現在の日本列島で、英語を日常的に使用されるコミュニティ言語として定着させることが可能な場所があるとすれば、それは小笠原諸島言えるのではないだろうか。小笠原が自らの独特な歴史をこういうふうに島の将来のために生かすことが出来れば、英語と日本語のバイリンガル時代が再び島で実現するのは夢ではないであろう。

現在の小笠原では、父島と母島の両方に専属の英語ネイティブ・スピーカー教員が配属されている。これは隴田房蔵教育長や父島・母島のそれぞれの小・中両学校の校長や教員の熱心さを反映している。全国に先立って小笠原の小学校で、英語が生きた話しことばとして登場している。この斬新な教育方針も小笠原ならではのことである。すなわち、英語の歴史を持っている島である上、内地から距離的に離れていて型にはまらない、そして行政単位が小さい分、自由自在に動きやすい、というのは小笠原の言語教育政策の特徴と言えよう。

現在の日本では、英語教育を小学校から始めるという「低学年化」の問題や、受験英語のための教育から実用的英語の教育へ政策転換、日本社会における多文化共存の教育などが話題となっている。しかも小笠原では、多言語、多文化、多民族社会がかなり昔に成立し、今も続いているので、日本全体が小笠原の成功や失敗から学ぶべきことは沢山あるように思われる。

一方、小笠原のことばは(標準)日本語と(標準)英語の2言語だけではない。小笠原の独特な言語現象が学校のカリキュラムで少し取り上げられていることは歓迎すべき傾向である。小笠原の国語の時間は内地で行われている内容とさほど変わらないが、国語以外の時間に生徒たちが小笠原ことばに触れることがある。現在でも、中学校の総合学習の個人研究で小笠原ことばに関連した課題を取り上げる生徒もいる。例えば、島の独特な料理や動植物をテーマにした子どもは、調べているうちに、島の独特な物の言い方に出くわすこともあると思われる。あるいは、小笠原小学校の金子和明校長が熱心に取り組んでいる南洋踊りを子供が習うことで、島の豊かな言語的歴史に触れることができる。

今回の教員を対象にした面接調査で、ことばを含めて島の独自の文化に関する資料をもっと授業で利用したいとの声があった。『小笠原学ことはじめ』など、専門書を使おうとしているが、高校生のレベルには難しすぎるという問題点も指摘された。ロングは以前から、

小笠原ことばの歴史や現在の使用状況をどのようにして調べれば良いか、ということに関する副教材の作成を考えていた。今回の渡島で同じような教材の作成に取り組んでいる小笠原高校国語担当の渋谷先生や英語担当の伊達先生および副校長の鶴田秀樹と会談し、意見交換をすることができた(図 10-1)。近い将来に共同で作成に取り組みたいと考えている。



図 10-1 小笠原高校で会談する新井、南谷、ロング、伊達、鶴田、渋谷

また、我々大学にいる研究者が持っている情報を島の子供が分かるようにすることも大事であるが、大人の地域住民へ情報提供、あるいは彼らとの情報交換も不可欠である。今回、その試みとして、ビジターセンターの「小笠原ことば特別展示」を企画した。本報告書の分担執筆者である橋本早帆が『小笠原ことばしゃべる辞典』(ロング、橋本 2005) のデータを元に、この展示を計画した。そして、私(ロング)がこのオープンに合わせて父島に渡り、展示を見ながらのトークショーを行なったが、島民との話し合いにおいて得られたフィードバックの中から参考になることがたくさんあった。それゆえ、研究が一步先へと進んだのである。小笠原中学校の前田渉校長が言う give and take の利点がここにも現れている。

さて、小笠原島民自身から、島を訪れる人のほうに焦点を移したい。観光客や研究者が小笠原へやってきたら、どのような言語環境を見るのであろうか。今回、これを二つの側面から追究した。一つは外国人(特に日本語の分からない外国人)にとっての小笠原諸島である。彼らは英語や中国語、韓国語などの外国語のみで島を楽しんだり、島で研究を行

ったりすることができるかどうかという課題である。

今回の調査で、英語に関して言えば、小笠原はかなりの「言語資源」を持っていることが分かった。英語のパンフレットが準備されているところ、英語の話せる人が勤務しているところなど、英語で対応することが可能となっているところが複数ある。今後必要なのは、(1) こうした英語対応が可能である実態をもっとアピールすること、(2) それぞれの対応の仕方をより綿密にリンクし、組織化(システム化)すること(例えば、ビジターセンターを訪れた英語圏の人が小笠原オオコウモリに関する英語の情報を求めたときに、その職員が「ここにはないが、〇〇に行けばあるよ」というアドバイスを可能にする情報交換システムを構築すること)、(3) そして、中国語や韓国語、あるいは日本手話といった英語以外の言語の対応を充実させること、である。

小笠原のような離島で暮らす人にとって、その文化も重要であるが、それと同時に外の世界との接点を持ち続けることも大事である。技術の進歩によって、離島生活者の孤立問題や「情報弱者」に陥る危険性がある程度緩和されてきている。今回の情報化の実態調査では、機材導入などのハード面において小笠原の情報化が進んでいることが分かった。今後は、それをどのように活躍するかというソフト面、運営面に関する課題がますます重要性を増すであろう。特に内地の大学にいる者として、このへんの取り組みで全面的に協力したいと考えている。例えば、次の可能性を模索中である。すなわち、小笠原に勤務中の教員が島にしながら、(小笠原村情報センターにすでに設置されている)テレビ会議システムを通じて、内地の夜間大学院の授業に参加する制度である。これが可能となれば、離島にしながら(内地へ来ずに)、しかも学校に勤めながら(休職せずに)修士号や博士号を取得することが可能になるであろう。情報化、IT化が小笠原のような離島での生活を豊かなものにしてくれるのである。

今回の調査で小笠原の多言語対応の実態に関して色々なことが分かったが、今後この情報をどのように活かすかがむしろ重要である。そこで小笠原の多言語対応と関係する提案をしたい。

- ・ 今回のプロジェクトの一環として、ビジターセンターの中国語版の案内を作ったが、中国語や韓国語など英語圏以外の観光客向けの情報の充実にも努める必要がある。現在、アジアからの観光客が少ないが、世界遺産登録による外国人観光客の増加も見込まれている。それに、現時点においてそれほど需要がなくても、外国語による情報を出すことによって客数が増えることも考えられる。
- ・ 上でも触れたような、小笠原ことばに関する副教材を作成すれば、複数の目的で活用することが可能であろう。小笠原ことばそのものを島の無形文化財の一つとして調べて保存するという意味合いもあるが、英語や国語、さらに歴史や社会の勉強との関連性を強調する。と同時に、社会科学系の現地調査(フィールドワーク)の方法論を教える手段として使用することも可能である。
- ・ 島で整えつつある情報通信のインフラをどのように島民のために活用すればいいか

が今後の重要課題であり続けるであろう。首都大学東京の教員としては、大学院（あるいはその後に学部）レベルの授業を、島民が島にいながらにして受講できるようにしたい。

- ・ 本稿で見たような小笠原ことばによる標識、看板を増やし、小笠原ことばを一つの「観光資源」として位置づけてそのさらなる活用法方を考える。こういうちょっとしたところで、観光客に「不思議なところに来た」と感じさせ、小笠原の独特な自然のみならず、奥の深い文化をも満喫できるように工夫をこらす。
- ・ 子供たちの英語弁論大会。審査員は内地から呼ぶのではなく、英語が話せる島民（欧米系島民、アメリカの大学を出た日系島民など、英語が話せるヨーロッパ系新島民など）に頼む。
- ・ 英語は弁論大会だけで使うものでもなければ、学校だけで話すものない。コミュニティ言語としての英語の日常的な利用を奨励する制度を村で作る。「英語常用家庭」や「英語常用会社」を制定し、なんらかの優遇措置を設ける。
- ・ かつての小笠原に入って来た人の出身地（八丈島、ホノルル、グアム、マサチューセッツなど）との交流（特に子供たちのホームステイ）を深めていく。グアムやホノルルに、自分の子供に日本語を学ばせたがっている親が数多くいるので、「言語交流」を中心とした短期プログラムが可能であろう。

参考文献

朝日新聞(2005)「知床、世界自然遺産登録で観光客13%増マイナス面も」『朝日新聞』2005年10月27日版

大阪樟蔭女子大学 日本語研究センター編(1998)「日本語研究センター報告」Vol.6 特集：『小笠原諸島の言語文化』

小笠原海洋センター HP (2006年10月21日現在) <http://bonin-ocean.net/>

小笠原支庁 HP (2006年10月21日現在) <http://www.soumu.metro.tokyo.jp/07ogasawara/32.htm>

小笠原商工会 HP (2006年10月21日現在) <http://www.gws.ne.jp/ogaisls/socal/shokokaitoha.htm>

小笠原水産センターHP (2006年10月21日現在)

<http://www.soumu.metro.tokyo.jp/07ogasawara/suisancenter/tenji/suizokukan.htm>

小笠原ホエールウォッチング協会 Ogasawara Whale Watching Association (2006年10月21日現在) <http://www.h2.dion.ne.jp/~owa/english/index.html>

外務省 (2007)「我が国の世界遺産暫定一覧表への追加記載物件の決定について」

http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/release/19/rls_0129a.html

川端裕人(1999)『動物園にできること 「種の箱舟」のゆくえ』 文春文庫

倉田洋二編(1984)『写真帳小笠原：発見から戦前まで』アボック社

国際交流基金(2006)『すぐに使えるレアリア・生教材のアイデア帖』 スリーエーネットワーク

斜里町経済部商工観光課 (2005) 『斜里町の観光』

<http://www.town.shari.hokkaido.jp/shiretoko/data/h17syari.pdf>

曾我部哲弥 (製作者) (1999) 『小笠原島物語』 ニッポン放送 (03月28日放送)

東京都 HP (2006年10月21日現在)

<http://www2.kankyo.metro.tokyo.jp/sizen/kouen/sisetsu/ogasawara/ogasawaravc.htm>

東京都小笠原村立小笠原中学校編 (1979) 『小笠原小中学校創立十周年記念誌』

林野庁 (2007) 「『小笠原諸島』の世界遺産暫定一覧表への記載について」

<http://www.rinya.maff.go.jp/puresu/h19-1gatu/0129ogasawara.html>

前納弘武 (2000) 『離島とメディアの研究—小笠原篇』 学文堂

文部科学省 (1998) 「新学習指導要領」 (平成10年12月告示15年12月2月一部改正)

http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301.htm

ロング、ダニエル編 (2002a) 『小笠原学ことはじめ』 南方新社

ロング、ダニエル編 (2002b) 『日本のもう一つの先住民の危機言語—小笠原諸島における
欧米系島民の消滅の危機に瀕した英語とその文化—』 「環太平洋の『消滅に瀕した言語』
にかんする緊急調査研究」 報告書 A4-015

ロング、ダニエル編 (2003) 『日本のもう一つの先住民の危機言語—小笠原諸島における
欧米系島民の消滅の危機に瀕した日本語— 環太平洋の『消滅に瀕した言語』にかん
する緊急調査研究』 報告書 A4-023

ロング、ダニエル (2004) 「小笠原諸島における日本語教育史」 『都大論究』 41:35-42

ロング、ダニエル・稲葉慎編 (2004) 『小笠原ハンドブック：歴史、文化、海の生物、陸
の生物』 南方新社

ロング、ダニエル・橋本直幸編 (2005) 『小笠原ことばしゃべる辞典』 南方新社

ロング・ダニエル他 (2005) 「小笠原における日本語習得の歴史—Navy世代の欧米系島民の
言語生活調査から—」 『小笠原研究年報』 28

Imai, Junko (2003) *English Ripples in a Japanese Sea: Bilingualism of the Navy Generation on
Ogasawara / the Bonin Islands, Japan*, Keio University graduation thesis.

Johansen, Terry (2006) *Waterfront Revitalization Plan for Port Futami, Chichijima Island, Japan*.
Master's thesis, University of Arizona.

Long, Daniel (1999) "Evidence of an English Contact Language in the 19th Century Bonin
(Ogasawara) Islands" *English World-Wide* 20.2: 251-286 (Amsterdam: John Benjamins).

Long, Daniel (2007) *English in the Bonin (Ogasawara) Islands*. Duke University Press.

謝辞

本稿のデータ収集にあたって、時間を割いてくださった島民の方々に感謝の意を表す (敬称略) : 伊藤聡史、大平京子、大平レンス、小笠原愛作、金子和明、木村ジョンション、佐々木哲朗、嶋田房蔵、島田絹子、新保あゆみ、鈴木創、Mark Stone、伊達丈浩、鶴田秀樹、延

島冬生、前田渉、森恭一、森山富佐子、南スタンリー、日高泰人、森山富佐子。小笠原におけるインターネット環境については、小笠原村総務課 IT 推進係／小笠原村情報センターの鈴木敏之、上部修一に貴重なお話を聞かせていただいた。小笠原ことばの特別展示の企画案を、写真やパネルの配置、実物の展示など様々な工夫を凝らし、多くの人々が楽しめるすばらしい展示に仕上げてくださいました小笠原ビジターセンターの大好マリをはじめとする職員の皆さんに、この場を借りて心からお礼を申し上げたい。

本稿は、首都大学東京の都市教養学部理工学系の可知直毅教授が研究代表となっている「小笠原における人と自然の共生をめざした学際的総合研究」の研究助成金を受けて行った研究である。

Multiple Language Usage on the Bonin (Ogasawara) Islands: A Field Survey Report

Daniel Long, editor

Abstract

This is a report on research (conducted as part of the research project “Multidisciplinary Research for the coexistence of people and nature on the Ogasawara Islands”) carried out by Daniel Long and graduate and undergraduate students of Tokyo Metropolitan University on the use of multiple languages in the Bonin (Ogasawara) Islands. Long begins with background information on Ogasawara and an outline of the project. Yoshimi Minamitani follows this with a section on the current state of and policy regarding language education, and another discussing observation studies on the state of elementary school English education. Chang Eiryou discusses Japanese and English language education at the junior and senior high school level. Next, Asumi Shimokawa examines one of the key media for transferring information (in any language) to and from the island: information technologies. Miki Horiuchi reports on our survey of what languages other than Japanese island facilities provide information in. Rui Yan provides a case study of the creation of such a foreign language resource when she examines problems and issues encountered in the creation of a Chinese language guide to the Ogasawara Visitor’s Center. Saho Hashimoto outlines another subproject of this research, the creation of a special exhibit on island language. Masato Arai analyzes photographs showing the usage of island language as a tourism resource. In the final section, Long sums up the findings of the research project.

小笠原諸島の多言語状況に関する実態調査報告

要旨

この調査は、首都大学東京の日本語教育学ゼミが2006年に小笠原諸島で行った現地調査の報告である。章立ては次の通りである。1：ロングが今回の『小笠原の「多言語対応」に関する実態調査』の概説を行う。2：村の教育長や諸学校の校長や教員を対象にした面接調査のデータから、南谷奉良が小笠原の学校教育の方針と現状を探る。3：南谷が小学校の英語教育に注目して、実態調査や授業参加などから得られたデータを分析する。4：張衛良が小笠原の中学と高等学校の英語および国語教育の現状を分析する。5：下川明日美が孤島と呼ばれてきた小笠原諸島における情報化の進行具合を実態調査に基づいて検証する。6：堀内みきが小笠原の様々な公的機関の提供している多言語情報の実態を分析する。7：ゼイ・エンが張衛良と協力して作成した小笠原ビジターセンターの中国語版案内を紹介し、その作成に至るまでの課題と問題点を分析する。8：橋本早帆が自ら企画した「小笠原ことば」に関するビジターセンターの特別展示を概説する。9：新井正人が、小笠原ことばを観光資源として捉え、「目につく小笠原ことば」の写真データを分析する。10：ロングが結果をまとめながら、その位置づけ、意義、そして残された課題を検証する。